



KANAGAWA

神奈川県

神奈川県立青少年センター

60th

Anniversary



神奈川県立青少年センター60周年記念誌

The History of Kanagawa Prefectural Youth Center
1962-2022

INDEX





P. 02 青少年センターの紹介

P. 03 開館60周年記念の取組

P. 04-05 時代の記録

P. 06-07 主なあゆみ（年表）

P. 08-27 ミッションに基づく活動

青少年の体験学習を推進する
支援・指導者の育成

青少年のひきこもり、
不登校や非行等への対応

青少年の科学体験活動の
促進支援

青少年や県民の舞台芸術活動
への支援

P. 28-69 60周年へのメッセージ

P. 70 奥付

column

石柱に刻まれたメッセージ (P. 17)

県内唯一の舞台機構！？ (P. 31)

クスノキは見ていた！ (P. 47)

金星の太陽面経過 (P. 54)

プラネタリウム (P. 59)

縄文土器に竪穴式住居～紅葉ヶ丘遺跡～ (P. 65)

「紅葉坂ホール」と「スタジオHIKARI」 (P. 69)

青少年センターの紹介

■ 開館

神奈川県立青少年センターは、「県立青少年センター」（神奈川県民生部所管）と「県立青少年ホール」（神奈川県教育庁所管）という別の組織として発足しました。

1962年（昭和37年）11月1日に開館式を挙行し、同年11月11日から一般公開を開始しました。

発足前の経緯については、「青少年センター十年史」に詳しく記載されていますが、たとえば、

『昭和34年度9月補正予算の査定において、…児童会館と理科教育センター並びに県民劇場という三つの要素を持った総合施設を…県立図書館前に建設することになった。…昭和35年4月の部長会議において、県立青少年センターの設計を前川國男氏に委託することが内定し…』

とあります。

その後、神奈川県立青少年センター条例が施行された昭和39年4月1日に一本化され、知事部局所管の県立青少年センターとなりました。

■ 建物

1962年（昭和37年）竣工。日本のモダニズム建築をリードした建築家・前川國男の設計によるもの。重厚な庇をはじめとするコンクリートの箱をくりぬいて作ったような大胆な建物で、ホール部の外壁等には大判の打込タイルが使用されています。

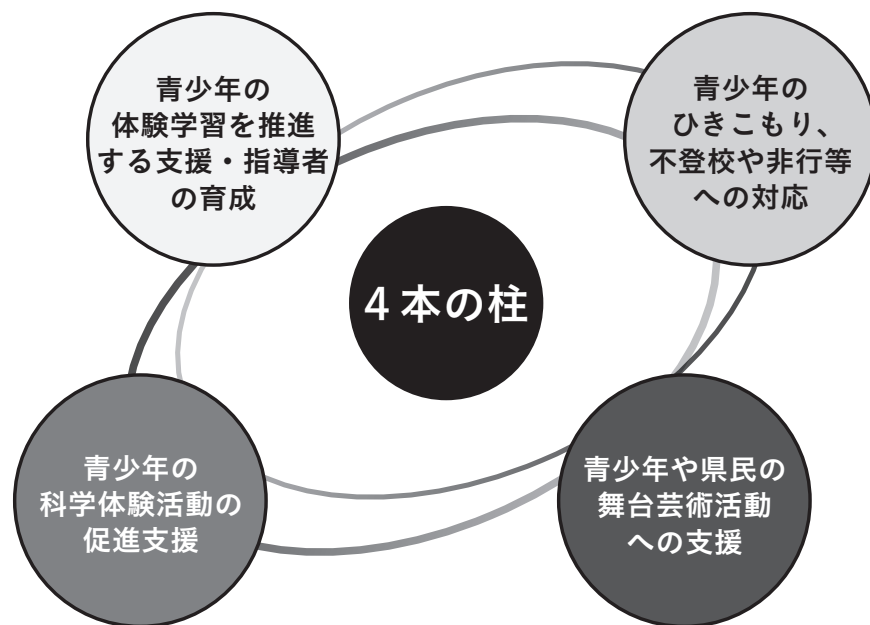
竣工時は地上5階の建物でしたが、平成17年の大改修により地上3階となりました。今なお建物内部の随所に5階当時の面影が残ります。

平成22年 第12回公共建築賞優秀賞、第19回BELCA賞
ベストリフォーム部門を受賞

平成30年 「日本におけるモダン・ムーブメントの建築216選」に追加選定

■ ミッション

青少年の健全な育成を図り、あわせて県民の教養の向上に資する



開館 60 年周年記念の取組

■ 記念ロゴマーク

県内在住・在学の中学生・高校生年代の方88名から応募のあった108作品より選ばれた伊沢龍斗さん(神奈川県立相模向陽館高校：当時)の作品。

木と双葉には青少年たちの成長、葉っぱの部分の斜めの線は紅葉坂…など、細部に様々な意味の込められた、まさに青少年センターにふさわしいロゴマークです。



■ 記念事業

「What'sSAMBASO～古典芸能の可能性」を開催

伝統芸能の鑑賞にとどまらず、その可能性や伝統芸能を扱った創作の秘密といった部分まで掘り下げて青少年向けに伝える「エンタテインメントレクチャープログラム」を開館60周年記念/紅葉坂ホールリニューアルオープン記念公演として開催しました。



©KUNIO



1962 開館



プラネタリウム



高校生のための歌舞伎鑑賞教室



レストラン



科学展示場



現在 **2022**



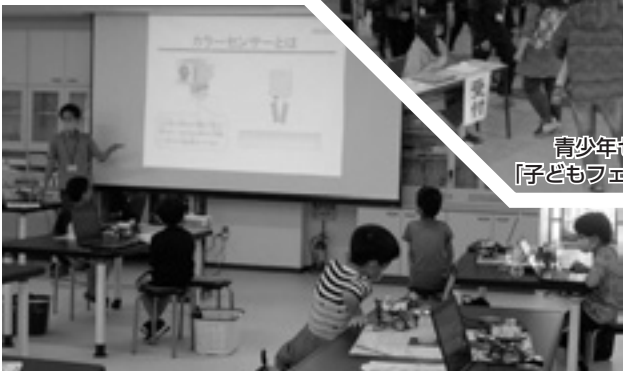
青少年サポート課「相談員研修」



ホール運営課「高等学校演劇講習会」



青少年センター
「子どもフェスティバル」



科学支援課「ロボットプログラム」



指導者育成課「リードアップセミナー」

主なあゆみ（年表）

年月日	青少年センターの主なできごと
1961 (昭和36年)	● 5月1日 県立青少年センター及び青少年ホール準備事務局発足
1962 (昭和37年)	● 6月9日 県立青少年センター及び青少年ホール起工式
	● 7月16日 県立青少年センター【知事部局民生部所管】 (庶務部-庶務課、経理課、指導部-指導課、 青少年問題研究室 学芸部-科学第1課、科学第2課、文化課)
	● 県立青少年ホール【教育庁所管】 (業務部-企画課、運営課)
	● 発足
	● 11月1日 県立青少年センター及び青少年ホール開館式
	● 11月11日 県立青少年センター及び青少年ホール一般利用開始
1963 (昭和38年)	● 4月26日 第1回青少年演劇鑑賞会開催
	● 5月5日 第1回こどもの日大会開催
1964 (昭和39年)	● 2月18日 県立青少年センターと青少年ホールが一本化。 (知事部局所管の県立青少年センターになる。)
1965 (昭和40年)	● 2月21日 第1回働く青少年交歓会開催
1966 (昭和41年)	● 5月15日 県立青少年会館開館
1967 (昭和42年)	● 6月29日 第1回公立中学校美術展開催
	● 10月1日 アマチュア無線局「JAIYYA」開局
1969 (昭和44年)	● 5月1日 機関紙「青少年センターだより」第1号発行
1970 (昭和45年)	● 7月28日 第1回歌舞伎鑑賞会開催
	● 9月22日 文楽鑑賞会（第20回青少年古典芸能鑑賞会）開催
1971 (昭和46年)	● 4月1日 県立青少年センター分館増設
1972 (昭和47年)	● 11月11日 県立青少年センター10周年記念式典挙行
1973 (昭和48年)	● 8月15日 第1回青少年芸術劇場開催
	● 11月22日 第1回勤労青少年指導者交歓のつどい開催

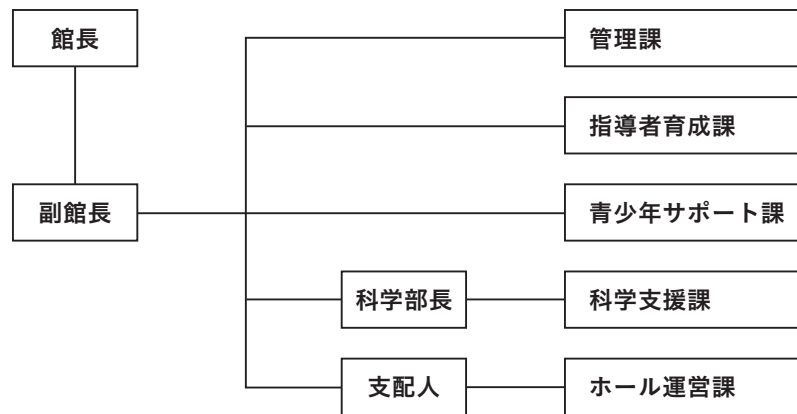
年月日	青少年センターの主なできごと
1974 (昭和49年)	● 2月2日 国際児童生徒絵画作品展開催
1977 (昭和52年)	● 5月5日 第1回子どもフェスティバル開催
	● 11月1日 第1回もみじのつどい開催
1979 (昭和54年)	● 8月5日 国際児童年記念公演会開催
1982 (昭和57年)	● 11月9日 県立青少年センター20周年記念式典挙行
1990 (平成2年)	● 5月5日 科学展示品原理演示実験「おもしろ実験」開催
1992 (平成4年)	● 11月1日 青少年センター30周年記念フェスティバル開催
1997 (平成9年)	● 4月1日 紅葉ヶ丘青少年会館を廃止し、県立青少年センター第二分館と改称
2001 (平成13年)	● 6月1日 県立青少年センター山下町駐在事務所を設置し、かながわドームシアターの管理運営を開始
2004 (平成16年)	● 4月1日 県立青少年総合研修センターを県立青少年センターに統合
2005 (平成17年)	● 4月1日 かながわドームシアターの管理運営を文化課に引継ぐ
	● 7月17日 県立青少年センター建物リニューアル記念式典挙行
2008 (平成20年)	● 4月1日 分館及び第二分館廃止。既存の県有施設を改修した別館に青少年サポートプラザを設置
2012 (平成24年)	● 4月1日 青少年サポートプラザに「かながわ子ども・若者総合相談センター」を開設
2018 (平成30年)	● 7月4日 県立青少年センターの建物が歴史的・文化的重要性がある近代建築の国際組織である「ドコモモ」に選定される
	● 10月24日 科学部が厚木市中町に移転
2019 (令和元年)	● 9月13日 もみじ坂景観改善工事により、県立青少年センター、県立音楽堂、県立図書館一帯に広場や遊歩道等が完成
2022 (令和4年)	● 12月9日 長年にわたり青少年と舞台芸術の出会いに尽力したことが評価され、公立文化施設として令和4年度地域創造大賞（総務大臣賞）を受賞する。

ミッションに 基づく活動

センターの組織、ミッションに基づく
活動について紹介します。



■ 組織



施設の維持管理・運営

管理課

青少年センターの事業を円滑に運営するため、財産管理、庁舎諸施設の維持管理、人事、予算経理、広報等に関する事務を行っています。

青少年の体験学習を推進する支援・指導者の育成

指導者育成課

子ども・若者に多様な体験学習の場を提供し、地域活動への主体的な参画を促すことで、問題解決能力や自己肯定感を育み、社会的自立を支援する青少年支援・指導者を育成するための研修を実施し活動を支援します。

青少年のひきこもり、不登校や非行等への対応

青少年サポート課

ひきこもり・不登校・非行など様々な悩みを有する子どもや若者、その家族等からの相談に応じるほか、青少年やその家族へのサポート活動を行うNPO団体等への支援を行っています。

また、ひきこもりや不登校支援に関する研修会や講演会を行っています。

青少年の科学体験活動の促進支援

科学支援課

青少年の科学体験活動の機会として県内各地で、実験・工作・天文などの科学講座、プログラミングやロボット工作、科学イベントを開催しています。

また、教員研修や科学体験活動の指導者の育成も行っています。

青少年や県民の舞台芸術活動への支援

ホール運営課（県文化課紅葉ヶ丘駐在事務所）

青少年や県民の舞台芸術活動を支援し、芸術文化の振興を図ることを目的に、舞台芸術の鑑賞事業や舞台芸術人材の発掘と育成を目指す「マグカルシアター」の開催、学校等の舞台芸術活動の支援事業を行っています。

また、紅葉坂ホールやスタジオHIKARIなどの施設の貸出しを行っています。

ミッションに基づく活動

■ 青少年の体験学習を推進する支援・指導者の育成

多様な体験学習を通して「子ども・若者」の支援・指導に携わる地域の方々のために、研修事業や活動支援を行っています。

青少年行政職員等研修 リードアップセミナー



新しく青少年行政・育成業務に携わる方を対象とした研修。アイスブレイキングや宿泊・野外炊事の体験のほか、青少年育成の現場に必要な知識や心構えを学ぶ。

子ども施設指導員セミナー



児童館等、子ども施設の指導員を対象とした、子どもたちが自ら成長できる環境づくりや支援の能力を向上するための研修。

青少年指導員セミナー



青少年指導員を対象とした、青少年指導員の活動について理解を深め、参加者相互の交流を図る研修。各地域県政総合センターと共催で行っている。

自然体験活動指導者セミナー<野外活動編>



地域で青少年活動に携わる支援・指導者が、野外活動に必要な初歩的な知識と技能の向上を図る。

■ 青少年の体験学習を推進する支援・指導者の育成

自然体験活動指導者セミナー<秋編>



身近な自然環境を題材として、自然の豊かさや大切さを様々なプログラムを体験して学ぶ研修、実際の指導も体験する。



<グループワークの活用法>

自然体験活動指導者セミナー<環境学習編>



地域で青少年活動に携わる支援・指導者を対象とした研修。環境学習プログラムとその指導体験を通して、自然の豊かさや大切さを学ぶ。研修修了者は、エドューケーター（初級指導者）として認定される。



<コミュニケーションワークショップ>

体験学習プログラムセミナー

地域や学校現場での子ども・若者の仲間づくりやコミュニケーション能力の向上を図る手法を、体験学習プログラムの体験を通して学ぶ研修。



<すぐに役立つアイスブレイキング>



<インプロワークショップ>

ミッションに基づく活動

■ 青少年の体験学習を推進する支援・指導者の育成

キャンプ活動セミナー



大学生年代を対象とした、子どもと理解しあうために有効なコミュニケーションスキルを、野外活動を中心とした体験型ワークショップによって学ぶ。

ユースボランティアセミナー



地域で活動している若者や活動しようとしている若者を対象とした研修。野外活動やレクリエーション活動の体験を通して知識や技術を学び、地域活動等で活躍するボランティア等の育成を図る。

子どもキャンププロジェクト



子どもを対象としたキャンプの企画・運営を通して、人間関係作りや子どもとの関わり方等を学び、地域活動等で活躍するリーダーの育成を図る。

イベントボランティアセミナー



イベントの企画・運営の方法や子ども達への対応力等を身につけ、地域で活躍するジュニア・リーダーやユース・リーダーの育成を図るとともに、子ども会活動の活性化を目指す。

■ 青少年の体験学習を推進する支援・指導者の育成

子どもフェスティバル・子ども会大会



青少年センター各課と繋がりがある団体の協力のもと、全館を挙げて行うイベント。子どもたちに多様な体験の場を提供し、県内の優良子ども会の表彰を行う。神奈川県子ども会連絡協議会との共催。

人材育成推進事業「ステップアップキャラバン」



青少年センターの研修受講生を青少年活動の現場に派遣する。レクゲームや野外炊事等の指導経験の場を提供し、知識や技術のスキルアップを図る。

中学生の主張 in かながわ



中学生の日頃の考えや思いを作文にして発表する大会。最優秀賞受賞者は「少年の主張全国大会」の出場候補者として推薦する。

神奈川県青少年指導者養成協議会



市町村・関係団体・県で組織され、青少年支援・指導者の育成を図る。子ども・若者と関わる活動をしている方を対象に、青少年活動に役立つ資料を作成している。

ミッションに基づく活動

■ 青少年のひきこもり、不登校や非行等への対応

「かながわ子ども・若者総合相談センター」と「神奈川県ひきこもり地域支援センター」を一体として運営し、福祉・教育・警察・心理・精神保健・キャリアコンサルタントの各分野の相談員が、ひきこもり・不登校・非行等に関する相談支援を行うほか、研修会などを行っています。

また、「青少年サポートプラザ」では、こうした悩みを有する方を支援するNPO等団体の活動支援も行っています。



電話相談



面接相談室の様子



青少年サポートプラザ

《かながわ子ども・若者総合相談センター》

平成24年4月から、不登校や非行など、子ども・若者およびその家族などからの相談に寄り添いながら課題を整理し、解決への糸口を一緒に考える総合相談窓口として、『かながわ子ども・若者総合相談センター』を設置している。相談の内容によっては、市町村の相談窓口や就労支援機関など、より適切な機関を紹介している。



令和3年度第2回相談員研修

(当日はオンラインでの配信を研修室Ⅰにて公開し、オンラインでの参加が難しい方も含め、広く研修の機会を確保した)



令和4年度第1回相談員研修(演習の様子)

県内で子ども・若者への相談支援を行う公的機関およびNPOなどの民間団体の相談員等を対象に、相談技術の向上に資する内容や現代の子ども・若者をめぐる問題に焦点をあてた内容の研修を実施し、子ども・若者への支援体制の強化を図っている。当研修では令和3年度より、オンラインでの研修の手法を導入し、コロナ禍にあっても多くの方の参加を受け入れることができた。

■ 青少年のひきこもり、不登校や非行等への対応



子ども・若者を理解するための講演会

「子どもの貧困」や「ゲーム依存」といった、子ども・若者を取り巻く問題、その背景となる社会環境などをテーマとして取り上げ、子ども・若者が直面する問題への理解を深め、地域や関係機関における取組の促進を図るため、『子ども・若者を理解するための講演会』を実施している。



神奈川県子ども・若者支援連携会議

全体会議・地域ブロック会議を開催し、国・県・市町村の教育、福祉、保健、医療、矯正、更生保護、雇用その他子ども・若者育成支援に携わる機関の代表者および相談支援担当者が一堂に会している。

会議では、子ども・若者支援に関する施策や地域課題の検討、相談支援に関する情報交換等を通じて全県および各地域における総合的な支援ネットワークの構築を目指す中で、子ども・若者総合相談センターとして、中核的な役割を担っている。



相談窓口紹介カード

県内の相談窓口の電話番号を記載した「相談窓口照会カード」を県内の小・中・高校に在籍する全児童・生徒等に配布し、当センターの他、児童相談所や県立総合教育センターなど、各相談窓口の周知に取り組んでいる。

《神奈川県ひきこもり地域支援センター》

平成22年11月から国の「ひきこもり支援推進事業」にもとづき設置され、ひきこもり状態にある当事者やその家族の相談支援を行っている。

令和4年度からは、新たに精神科医師、弁護士、臨床心理士、社会福祉士、精神保健福祉士からなる専門職チームや、市町村等支援員、訪問相談支援員を配置し、市町村などの地域における関係機関への支援体制の強化や中高年世代への支援強化を図っている。



居場所活動

ひきこもりの状態から、何かを変えたい。外に出るきっかけがほしい、ひきこもり経験者の話を聞きたい、家族以外の人と関わってみたい、困っていることを相談したい…そんな当事者に気軽に立ち寄ってもらえ、ほっとできる居場所を令和4年度、市町村と連携して立ち上げた。

ミッションに基づく活動

■ 青少年のひきこもり、不登校や非行等への対応

《青少年サポートプラザ》

不登校やひきこもり等で悩む方を支援するNPO等団体に対する支援、団体との協働事業、団体スタッフ等に向けた研修等を行っている。



サポートプラザ（場所の提供）

不登校やひきこもり等で悩む方を支援するNPO等団体が利用できる部屋（活動室）、誰でも自由にチラシ等を閲覧できる情報コーナーを運営している。



フリ・フリ・フェスタ

不登校・ひきこもり等の青少年や家族を支えるフリースクール・フリースペース等と共催して実施する交流イベント。物品販売や座談会、舞台発表などを毎年青少年センター内で行っている。



NPOスタッフ研修

ひきこもり・不登校・非行などの問題に取り組むNPOのスタッフ・ボランティアを対象に、支援者としての心構え、望ましい支援のあり方を考える研修を行っている。



ひきこもり地域理解促進事業

不登校・ひきこもり青少年の親の会、自助グループ及び支援団体等の自主的な取組の活性化と地域の人々のひきこもりへの理解を促進するため、団体等が企画する講演会等を青少年センターが共催し、協働で実施している。

column

石柱に刻まれたメッセージ

青少年センター内外に設置された幾つもの彫刻。その中から世界的な彫刻家・流政之（1923-2018）の3作品『潮 Tide』『波 Wave』『舷 Gunwale』（1962）を紹介します。

中でも、紅葉坂に面した『潮 Tide』には、開館当時の内山岩太郎知事の揮毫による、実に「青少年センター」

らしいメッセージが刻まれています。是非見つけてみてください。

この『潮 Tide』は、大規模改修前までのメインの入口であった外階段脇に設置されており、当時の施設に入る全ての青少年が、この『潮 Tide』の横を通り抜けていきました。



『波 Wave』



『潮 Tide』



『舷 Gunwale』



内山岩太郎元知事揮毫文

※ 『舷 Gunwale』については、ホール内テラスに作品が置かれており、ホール利用時には見学ができません。

ミッションに基づく活動

■ 青少年の科学体験活動の促進支援

科学は文化、科学は生きる力

青少年に科学を身近に感じてもらえるように、実験・工作・天文・プログラミングなどの講座や、県内各地で実験ショーを実施しています。

また、教員や一般の方を対象にした科学実験・工作指導者を育成するセミナーや、高校生を対象にした科学ボランティアの募集も行っています。

☆ 子ども科学講座・ものづくり体験教室



体験を通して科学の視点を養う

実験・観察やものづくりの講座を通して科学に関する理解を深め、科学的な視点を養います。

☆ プチロボで競走しよう



県内各地でロボット工作&競技会

「はんだづけ」を行い、コントローラー付きの小さなロボットを組み立てます。操縦練習の後、特設コースでボール運びのタイムを競います。

☆ ロボットプログラム



プログラミングを楽しく学ぶ

レゴ®マインドストーム®やProroといったロボットを使い、プログラミングを学びます。ロボットの動きを確認し、自分の思い通りにロボットが動くようにプログラムを組んでいきます。

☆ 小学生科学研究クラブ

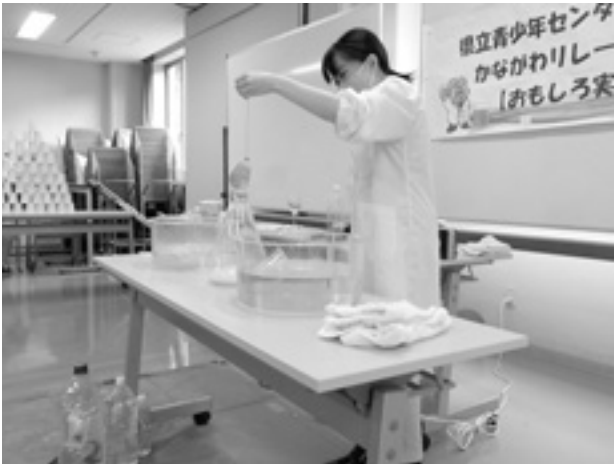


夏の自由研究をサポート

各自でテーマを決めて研究をし、その成果を発表します。テーマの決め方、研究の方法、まとめ方を職員がサポートします。

■ 青少年の科学体験活動の促進支援

☆ かながわりレー科学教室



県内各地で実験ショー

実験ショーと科学工作を通して、科学への興味関心を高めるとともに、その原理を学びます。

☆ 星空教室



横浜で天体観察会

青少年センター（紅葉ヶ丘）の屋上で、天体望遠鏡を使って月や惑星、明るい星雲・星団等の天体を中心とした天体観察会を実施しています。

☆ 自然観察会



自然の中で生物に触れる

県内の自然について体験的に学び、身近な自然環境に対する興味・関心を高めます。

☆ 高校生天文講座



高校生向けの天体観測実習

全10回ほどの連続講座を通して天体望遠鏡の使い方、冷却CCDカメラやCMOSカメラを使った天体撮影の方法を習得できる講座です。

ミッションに基づく活動

■ 青少年の科学体験活動の促進支援

☆ 子ども科学探検隊



小学生が研究施設を訪問

県内の大学、科学館、動物園、企業等を訪問し科学に関する興味・関心を高めます。

※主催：神奈川県青少年科学体験活動推進協議会

☆ 中高生サイエンスキャリアプログラム

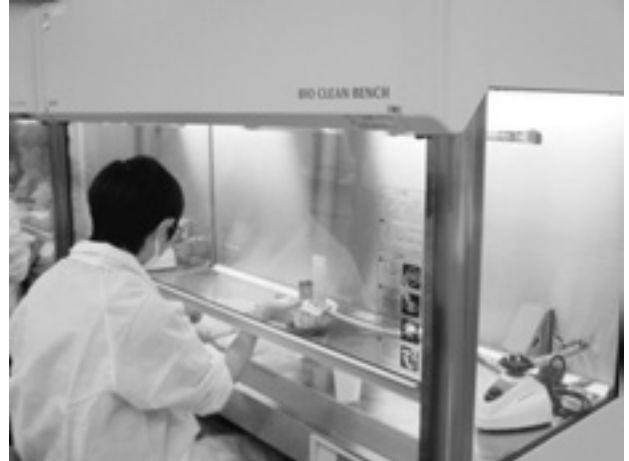


中高生が研究施設を訪問

県内の大学、科学館、企業等を訪問し、将来の進学や就職を考えるきっかけとします。

※主催：神奈川県青少年科学体験活動推進協議会

☆ 先端科学連携体験事業



カナラボ

高校生実験・実習講座

高度な科学研究の一部を体験をしたり、高校で扱われないような実験や実習を行ったりします。

☆ 高校生科学ボランティア



高校生による科学体験活動支援

青少年センター科学部の講座の運営や、子どもたちの体験活動をサポートする高校生ボランティアを募集しています。

■ 青少年の科学体験活動の促進支援

☆ おもしろ実験・科学工作指導者セミナー



科学の指導者を養成

子どもたちに科学の楽しさ、すばらしさを伝えていく指導者を養成します。

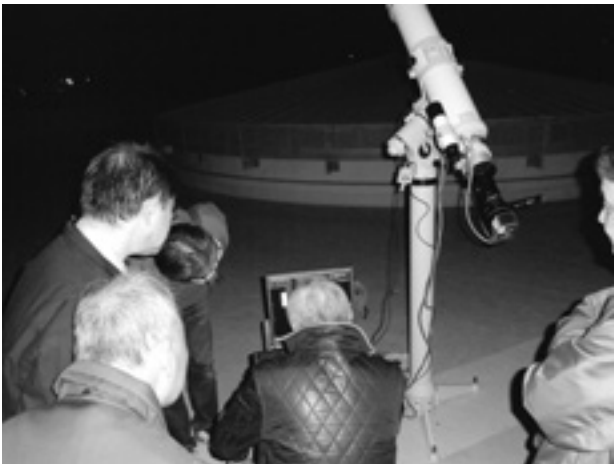
☆ 教員研修



教育機関との連携

県立総合教育センターや市町村教育委員会等と連携して教員向けの講座を実施しています。

☆ 天文研究クラブ



天文の指導者を養成

高校生天文講座の修了生や一般の方向けに天体望遠鏡や観測機材の使い方、天体写真撮影に関する情報交換などを行っています。

☆ 科学イベント



青少年のための科学の祭典神奈川大会

青少年のためのロボフェスタ

子どもサイエンスフェスティバル

科学やロボット関連技術など、様々な体験ができるブースが出展するイベントです。青少年センター（紅葉ヶ丘）や県内各地の会場で開催します。

ミッションに基づく活動

■ 青少年や県民の舞台芸術活動への支援

神奈川県立青少年センターは、演劇の上演を想定した最初の「県民劇場」として設計された歴史があり、館内には歌舞伎の上演に対応した廻り舞台などの舞台機構を備えた「紅葉坂ホール」(812席)、レイアウトフリーの小劇場スペースとしての「スタジオHIKARI」(114席)、その他「練習室」や「演劇資料室」等があります。



〈紅葉坂ホール〉

それらの施設を活用し、開館当初から、舞台芸術を通じた青少年の健全育成を軸に、青少年や県民の舞台芸術活動の支援や、芸術文化の振興に取り組んできました。

具体的には、学校教育と連携して行う演劇・ダンスなどの創造活動への支援や、演劇・ダンスから伝統芸能に至るまで、多彩な舞台芸術の鑑賞機会の提供、県民の皆様の文化活動の発表の場の提供などに取り組んでいます。

また、近年では、若いアーティストに対する人材育成事業や青少年を巡る社会課題の解決に向けた取組みも実施しています。

なお、こうした取組みは、開館時より一貫して県直営で行われており、これらの長年にわたる青少年と舞台芸術の出会いに尽力してきたことが評価され、令和4年度には公立文化施設として地域創造大賞（総務大臣賞）を受賞しました。

時代に即した舞台芸術に触れる

単なる鑑賞ではなく、学校の部活動等で演劇・ダンスといった舞台芸術に親しむ青少年の活動に刺激を与え得る、同時代に活躍する作り手による作品を上演する「青少年芸術劇場」（令和4年度まで全307作品を上演）などを開催しています。公演だけではなく、青少年向けのワークショップやオープンリハーサル、出演者としての起用など、〈鑑賞+体験〉を意識した企画を心掛けています。



〈2019 CHAiroiPLIN 『AZUKI』〉 ©おたこうじ



〈2022 ニプロール 『距離のない旅』〉

■ 青少年や県民の舞台芸術活動への支援

中高生の演劇・ダンスを支援

主に中学校、高校における演劇・ダンスの部活動を支援するため、紅葉坂ホールやスタジオHIKARI、練習室など青少年センターの全施設を使用して、発声や演技、脚本、演出、身体や道具の使い方など、基礎から応用までを学ぶ各種講習会を開催しています。夏休み期に行われる「中学校演劇講習会」「高等学校演劇講習会」「青少年ダンス講習会」は、毎年県内全域から数百人の青少年が参加してそれぞれ2日間実施しています。

普段の部活動とは異なり、様々な学校や学年の生徒たちが一緒に学び、お互い刺激を受けることで一層の効果を上げています。



〈2019 中学校演劇講習会〉



〈2019 高等学校演劇講習会〉



〈2019 青少年ダンス講習会〉

さらに、夏の講習会で得たことを元に、実際に創作した作品を発表する場が、秋の「発表会」になります。

この「発表会」は、同時に学校演劇の関東大会や全国大会につながる県大会にも位置付けられており、「中学校演劇発表会」、「中学校創作劇発表会」、「高等学校演劇発表会」などを開催しています。一方、ダンス分野では、中学生から高校生、大学生、卒業生までが参加する、「青少年ダンス発表会」を実施しています。



〈2018 高校演劇発表会 返子開成高等学校 全国大会最優秀賞〉

ミッションに基づく活動

■ 青少年や県民の舞台芸術活動への支援



〈2021 中学校演劇発表会 横浜市立日吉台西中学校〉



〈2022 青少年の舞台表現のためのスキルアップクラス
【ダンス編】 講師：平原慎太郎〉



〈2017 青少年ダンス発表会 県立大和高等学校〉



〈2022 青少年の舞台表現のためのスキルアップクラス
【舞台美術編】 講師：伊藤雅子〉

青少年センターでの取組みの大きな特徴は、この夏の「講習会」と秋の「発表会」が相互に関連していることです。つまり、青少年が自らの創造活動に必要なインプットの場と、アウトプットの場が通年の取組みで用意されており、それらが劇場機能を最大限活用して大規模に開催されます。この「青少年センター方式」ともいうべき財産は、施設が続く限り継承し続ける必要があると考えています。

また、夏の大規模の講習会では飽き足りない中・上級者を対象に、部活動では得られない技術などを一線で活躍する講師陣から少人数で集中的に学ぶ、舞台表現のためのスキルアップクラスや、県内各地に講師を派遣して、地域の学校や個人を対象にアウトリーチ講座を実施しています。



〈2021 高校生対象ダンスワークショップ「心技体+創」〉
講師：MAR SKI、KENTO、SETO、GEN ROC、AMI、AKIKO

■ 青少年や県民の舞台芸術活動への支援

また、児童向けに図書館等で人形劇の上演などを行うアマチュアサークルに対し、児童劇グループ交流会を開催して、各団体の交流を図るとともに、講師による実演に係る指導を行っています。

この交流会は、人形劇フェスティバルとして、子どもたちに作品を上演しています。



〈児童劇グループ交流会（人形劇フェスティバル）〉

舞台芸術に取り組む青少年を支援・育成

中学校や高等学校との連携による講習会や発表会とは別に、卒業生や個人で本格的に舞台芸術に取り組みたい青少年に対し、マグカル・パフォーミングアーツ・アカデミー（ミュージカル）、青少年のための芝居塾（演劇として、歌・ダンス・演技等の指導から本公演開催までのステップを経験させること）等で育成、支援に努めています。



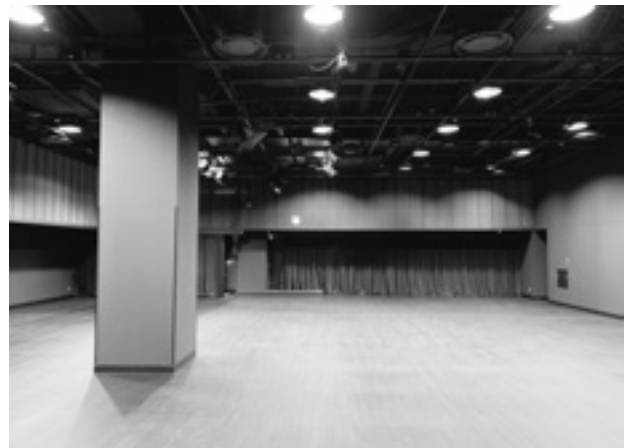
〈マグカル・パフォーミングアーツ・アカデミー〉



〈青少年のための芝居塾〉

小劇場スペース「スタジオHIKARI」の整備

2019年3月に「多目的プラザ」をブラックボックス化等の小規模改修工事を実施し、小劇場スペース「スタジオHIKARI」としてリニューアルしました。



〈スタジオHIKARI〉

若手アーティストが使いやすい規模感（114席）で、自由に客席や舞台をアレンジできるフラットな小劇場スペースである「スタジオHIKARI」では、公演会場と稽古場（研修室）の提供を行う若手アーティスト育成事業「マグカルシアター」を通年で開催し、年間30以上の演劇やダンスの公演を行っています。

ミッションに基づく活動

■ 青少年や県民の舞台芸術活動への支援



〈2019 スタジオHIKARIリニューアル記念ダンス公演
森下真樹 現在・過去・未来『てんこもり』〉 ©bozzo



〈国立劇場制作の歌舞伎鑑賞教室 令和4年度「彦山権
現誓助剣一毛谷村一」(左から)片岡孝太郎、中村又五
郎、小川綜真、上村吉弥〉



〈2021 趣向「みえないこどもたちvol.4『パンとバラで退
屈を飾って、わたしが明日も生きることを耐える。』〉
©牧野智晃



〈2017 人形浄瑠璃文楽「曾根崎心中」より天満屋の段〉
©青木信二

伝統文化をもっと身近に

青少年向けの古典芸能の鑑賞事業として、国立劇場との共催による「歌舞伎鑑賞教室」や文楽協会との共催による「人形浄瑠璃文楽」を開催しています。

また、転入者が多い神奈川県の特徴を踏まえ、身近な地域の伝統文化（民俗芸能、祭礼や年中行事、伝承遊びなど）の普及啓発事業として「かながわ伝統文化こども歳時記」にも取り組んでいます。

その他にも、青少年センターで開催される青少年向けの日本舞踊、能楽のワークショップ、「相模人形芝居大会」といった共催事業も開催しています。



〈2022 かながわ伝統文化こども歳時記〉

■ 青少年や県民の舞台芸術活動への支援

青少年を巡る社会課題の解決のために

平成30年度より、ホール運営課と青少年サポート課とのクロスファンクション事業として、青少年センターが長年取り組んできた、青少年の自立支援のための機能を活かして、ひきこもりなどの心の課題を抱えた青少年に向けた、舞台芸術ワークショップや創作活動を行っています。



〈2019 舞台芸術活用青少年支援事業 きらりダンスワークショップ 講師：北尾亘〉



〈2021 寄宿生活塾はじめ塾×東京デスロック
『Anti Human Education V～Teens Revenge Edit.～』〉

県民の舞台芸術創造活動を支援

県機関、市町村や各種の学校、様々な舞台芸術団体等と協力して行う共催事業、後援事業などのほか、県民・一般の方々に、紅葉坂ホール、スタジオHIKARI、練習室を貸出しており、演劇や日本舞踊、バレエの発表会、講演会、シンポジウムなどに広く活用されています。

演劇資料室

平成17年の青少年センター大規模リニューアルにより設置された演劇資料室では、国内外の戯曲をはじめ、演劇図書・演劇雑誌、アマチュア演劇資料などを揃えており、神奈川県演劇連盟・横浜演劇研究所と協力しながら、案内、貸し出しなどの運営業務を行っています。中学校・高等学校の演劇で使用される戯曲集なども整理しており、生徒たちの台本選びや上演に関する相談にも応じています。



〈演劇資料室〉

60周年への メッセージ

「青少年センターの思い出」

「私だけが知っている青少年センター」 etc…

これまで関わってきた方々から

60周年に寄せるメッセージを

いただきました。



紅葉ヶ丘文化ゾーンの青少年センター

株式会社前川建築設計事務所 所長
橋本 功

掃部山公園の南、周辺に住宅地が残る元知事公舎跡地に、1954年神奈川県立図書館・音楽堂が竣工した8年後の1962年、青少年センターは竣工しました。敷地が図書館・音楽堂と一体と看做されたことから県は「音楽堂と無関係では考えられない」と音楽堂の設計者前川國男に設計を委託しました。青少年センターは青少年が科学と芸術を体験する研修室やホールや天文室等を併せ持つ複合施設で、外観は研修棟の打放しコンクリート壁の量感ある造形と、公共建築では我が国最初の打込みタイルの壁で構成された地上5階建です。1991年「かながわ文化施設21世紀構想」が発表され、翌年の「紅葉ヶ丘文化ゾーン基本構想」により、図書館・音楽堂と共に青少年センターは解体の危機を迎えますが、10年後の2002年構想が白紙となり、同年12月には「神奈川県有施設長寿命化指針」発表という政策転換により、一転青少年センターはそのモデル施設として長寿命化のための大規模改修が実施されました。

大規模改修は耐震補強と用途変更が図られ、屋上の天文台と5階の食堂の撤去、4階のプラネタリウムの床を撤去し、3階を天井の高いスタジオや研修室に改修して建物重量を軽減し、ホールの壁以外の内装・設備を全て撤去更新するスケルトン改修で、外観を変えずに5階建が3階建となりました。さらにホール客席椅子巾を上げて見やすい千鳥配置に改修、また舞台搬入口や楽屋を増築して舞台バックヤードの充実が図られ、さらにホール緞帳の復元も行いました。緞帳は日本芸術会員・文化勲章受章の日本画壇の巨匠杉山寧の原画で、織は今日では稀な填糸綴の貴重なもので、経年による変色・ほつれ劣化により安全性が危惧されていました。そこで糸根付けや包内の原色をもとに新たに糸を染色し、37種の撚糸をつくり、オリジナルと同じ填糸綴で復元、オリジナル緞帳の一部はタピストリーとしてロビーに展示しました。この大規模改修は高い評価を受け2010年公共建築優秀賞とBELCA賞ベストリフォーム賞を受賞しました。2019年には青少年センター前駐車場が整備され65年前前川が思い描いた新たな景観が誕生しました。多くの関係者の受け継がれた思いによって育まれた青少年センターが、紅葉ヶ丘文化ゾーンを形成する文化資産として人々に永く親しまれ続けることを願う次第であります。



竣工時の青少年センターの景観

60周年へのメッセージ

建築見学ツアー

『県立青少年センターで前川建築を学ぶ』

ボランティアグループ bridge 代表
渡辺 恵市郎

紅葉ヶ丘にある「県立青少年センター」、「県立図書館」、「県立音楽堂」そして閉館した「神奈川婦人会館」は、ル・コルビュジェに師事し、戦後モダニズム建築の旗手とされる前川國男氏が設計したものです。そして、一人の建築家が違った年代に設計した建築物が集まった紅葉ヶ丘の空間では、近代建築の歴史を感じることが出来ます。

このような背景から、2019年10月11日、神奈川県立青少年センター主催の『県立青少年センターで前川建築を学ぶ』と題した建物内外部の建築見学ツアーが開催され、多くの方々に参加し、楽しんでいただいたようです。しかし、ガイドを担当した前川建築大好き人間の集まりである私共bridgeメンバーが、準備段階から前川建築を堪能し、最も楽しんだと言えます。

「県立青少年センター」は、木目模様の丸柱や大庇構成の打放コンクリート、そして大判打込タイルの外壁等からなる重厚感ある建物の特徴としています。そして、建築家前川國男の作風変革時の作品として、新しい建築工法が挑戦的に試行されている様子も窺うことが出来、前川建築マニアにとっては興味深い建物です。

さらに、2005年に実施した大規模改修工事では、4.5Fの床を撤去する減築工法で耐震補強を達成しています。この大胆とも言える工法採用で、建物外装の保存が可能となり、紅葉ヶ丘の県立図書館・音楽堂と一体となった地域景観を維持することが出来ています。このように、神奈川県の前川建築の保存・維持方針は明確であり、今年の『前川國男館』発足にもつながっていると理解しています。

「県立青少年センター」エントランス脇の屋外に彫刻家「流政之」の作品「青年の船出・潮」があります。この作品に「青少年諸君 しっかり頼む」と刻まれた当時の内山岩太郎知事の言葉を見るたびに、「県立青少年センター」をはじめとする紅葉ヶ丘の前川建築の保存・維持活動を次の世代にもしっかり頼みたいと願っています。

青少年センター開館50周年記念行事の 思い出

神奈川県立青少年センター元館長
(平成24年度～28年度) 薄井 英男

私が、館長を拝命した平成24年度は、県政の財源不足をきっかけに、急遽、「緊急財政対策本部調査会」が発足し、「県有施設の原則全廃」の視点に立った見直しの議論が始まった。その大嵐を乗り越え、青少年センターを存続させるために、青少年センター開館50周年記念行事を活用し、当時の舞台芸術課長の池上さんや、中学校や高校の学校演劇の専門部の方々と一緒に、数ヶ月間で「学校演劇交流集会」を企画・開催した。

まず、①大船高校演劇部の文化庁長官賞（全国2位）受賞作「新釈姥捨山」の素晴らしい凱旋公演を行い、そして、公演後の大船高校演劇部の部長さんのお礼の挨拶の中で、予期せず「青少年センターの存続」の訴えが入り、思わず目頭が熱くなった。さらに、②扉座の横内健介さん、俳優の紺野美沙子さん等をお招きし、黒岩神奈川県知事にも参加していただき、「学校演劇を考えるシンポジウム」を開催し、多くの観客の前で青少年センターホールの足跡と実績、演劇教育の重要性を語りあげていただいた。

その結果、その日、青少年センターは、「緊急財政対策」の荒波を乗り越えるための橋頭保を作り、最終的に別館の売却は免れなかったものの、施設本体を存続させることができたと考えている。

館長をしていた、その5年間は、青少年の舞台芸術の振興のみならず、青少年センターの職員が協力して実施する「子どもフェスティバル」などの一連の行事を通じて、職員同士の絆を深め、さらに支援の必要な青少年のための相談事業や、青少年の健全育成事業、科学教育の振興などに取組む場の存続と、事業の充実に取り組んだ。

そして、それは県職員として最後の勤務期間であり、かつ最高に楽しく充実した期間であった。

神奈川県立青少年センター開館60周年 記念誌発行に寄せて

神奈川県立青少年センター元館長
(平成30年度～元年度)
南雲 正二

神奈川県立青少年センターが、ここに開館60周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

私は、平成30年度（2018年度）から令和元年度（2019年度）までの2年間、館長として在籍し、元号が平成から令和に変わるとともに、青少年センターを中心とした紅葉ヶ丘の景観が大きく変貌する時期を過ごしました。

2019年はラグビーワールドカップの日本開催があり、これに合わせて、紅葉ヶ丘地域にある前川國男氏設計の県有施設（青少年センター、図書館、音楽堂）の魅力を引き出し、賑わいを創出するとの目的で実施したのが「もみじ坂景観改善工事」です。

整備工事は2019年4月から8月末にかけて行い、それまで「ザ・駐車場」であった部分が、現在の開放感ある広場へと生まれ変わりました。私は間近で工事のビ

フォー・アフターを見ておりますが、以前がどうであったかすぐには思い出せないほどアフターのイメージが鮮烈で、建設当手を復刻した外灯も含めて空間を意識したリニューアルでこれほどまでにイメージが変わるものと驚いたことが、昨日のこのように思い出されます。

この景観の中でも変わらないのが広場の象徴である「楠木」です。横浜開港以来あの場所にあり、これまでも、そしてこれからも、広場を訪れる皆様を見守ってくれることと思います。

私が離任してからまだ2年余りしか経過していませんが、この間、少子化はもちろんのこと、コロナ禍による社会の変化、それに伴う家庭生活、学校生活の変化などによって、青少年を取り巻く環境は激変しているのではないかと想像します。そうした中で、青少年センターに期待される役割は益々大きくなっていると思います。これからも、全国でも数少ない青少年のための総合施設として、神奈川県立青少年センターへの支援をよろしくお願いいたします。

結びに、神奈川県立青少年センターの一層のご発展と、皆様方のご活躍を祈念致しまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

column

県内唯一の舞台機構！？

紅葉坂ホール。ここには県内で唯一、現役で稼働する特殊な舞台機構があります。歌舞伎が発祥とされる日本独特の舞台機構、一体何でしょうか？

（ヒント）舞台面には怪しい溝、奈落には謎の車輪がそれぞれ円状に巡らされています。

正解は裏表紙で。



60周年へのメッセージ

青少年育成拠点と演劇の殿堂

神奈川県子ども会連絡協議会会長
山上 武久



子ども会大会

神奈川県立青少年センターの開館60周年、誠にありがとうございます。

高校球児の晴れ舞台は甲子園球場であり、ラグビーは花園ラグビー場である。神奈川県中学生・高校生演劇の殿堂は神奈川県立青少年センターホールである。

県立青少年センターが10周年を経て充実期に入った昭和51年に、茅ヶ崎青年会議所（JC）理事長の年間活動目標を青少年育成として中学校演劇の活発化としました。高校生時代に演劇を齎った私はJC青少年開発委員会に所属し、中学校演劇部顧問による中学校演劇連絡会を発足していただき、梅小体育館の発表会では舞台装置の運搬、演劇部員の送迎などのバックアップをし、昭和55年の第5回発表会は茅ヶ崎市民文化会館小ホールの柿落し月間に参加することもできました。神奈川県中学校演劇発表会に優秀校を青少年センターホールの出演にもかわり、夢を実現することができました。

当時の県立青少年センター舞台芸術部長・田村忠雄先生のご指導を仰ぎ、準備、発表会の審査、JC例会で講演をお願いするなど、数年間大変お世話様になりました。時には田村先生とJC仲間と杯を酌み交わし演劇談義をしたことなどは懐かしい思い出です。

中学校演劇連絡会の活動が評価され、昭和56年度に茅ヶ崎地区中学校教育研究会演劇部会となり、ますます発展

していることもうれしいことです。

県子連は青少年センター設立以来青少年育成活動の拠点として利用しており、子ども会員、ジュニアリーダー（JL）・ユースリーダー（YL）、育成指導者は指導者育成課の先生から学んだノウハウを市町村子連から単位子ども会まで様々な活動プログラムを届け、県全体の青少年育成に大きな成果を上げております。

県子連行事である子ども会大会&子ども会交歓会は第30回大会を機に内容を一新し、平成23年度より青少年センターと県子連の共催による子どもフェスティバル・子ども会大会として再スタートいたしました。指導者育成課・各部の先生方のご指導による子ども会発表の場として、優良子ども会表彰式、作ってあそぶクラフト、昔の遊び体験、青少年センター各部による出し物、屋台など様々なプログラムで展開し、子ども会とJLの育成教育の場として多くの参加をいただき大変にぎやかに開催されております。

青少年センター開館60周年を機に子ども会の重要な指針でもある「長く伝わるものは必ず理由がある（柳田国男）」を大切に考えながら指導者育成課のご支援をいただき、JLを始め育成指導者は社会の宝である子どもを育てることにより素晴らしい神奈川の発展となるよう、子ども会の新たな姿を目指すことをお誓いするとともに、青少年センターが青少年育成活動の拠点とホール（現在の名称は紅葉坂ホール）のますますのご発展をお祈り申し上げ、開館60周年のお祝いのご挨拶とさせていただきます。

青少年センターとの10年間

神奈川県子ども会連絡協議会ユース・リーダーズ・クラブ
"かながわ戦隊県子レンジャー" 渡邊 あゆみ

小学生の頃、子ども会の活動で行ったキャンプ。その時にいたリーダーのお兄さんお姉さんがかっこよくて、憧れてジュニア・リーダー（以下JL）になりました。中学1年生のときから6年間、ほとんど部活で出られなかったリーダー活動でしたが、最後の最後、高校3年生のときに神奈川県子ども会ジュニア・リーダー大会に参加さ

せていただいた時、キャンプファイヤーを主になって進めている"県子レンジャー"のお姉さんが本当にかっこよくて、ユース・リーダーの世界に大学1年生の頃から入りました。

そのユース・リーダーズ・クラブ"かながわ戦隊県子レンジャー"（以下レンジャー）に19歳の頃に入隊した年が、神奈川県立青少年センターとの出会いの年でした。

初めて青少年センターの皆様とたくさん関わる機会となったのが、子どもフェスティバルでした。リーダーが子どもたちに向けて体験ブースを開いたり、子ども会の活動を紹介できる機会があったり、何より県内のJLがたくさん集まってみんなで考えて進めるこの企画。本当にすごいなと思ったことと、青少年センターの方々との関わりが学びしかなくて、子ども会という世界の深さと様々な人が関わるつながりがあるからこそ成り立っている世界だということを感じました。

そんな青少年センターが主催する子どもフェスティバルや若者ボランティアセミナー、ユースボランティアセミナーなどに参加させていただいたり、ステップアップキャラバンなどを通して関わらせていただいたりして今年で10年。私も、現役リーダーとしての節目となり、卒業の年となりました。

この10年を思い返して、青少年センター指導者育成課の皆様から得たものは計り知れないほどですが、特に感じていることは、きっかけをたくさんもらった、ということです。子どもフェスティバルなどで、色々な市区町村の仲間たちと出会うきっかけや子ども会活動の幅を広げられるきっかけ。若者ボランティアセミナーではいろいろな立場の若者に出会って色々な考えを得られるきっかけ。

また、いつもレンジャーでは企画する側の中、センター主催のキャンプなど宿泊のイベントに「参加者」として楽しく参加していた時に、「あ、小学生のとき子ども会活動で楽しかったキャンプだったな」と原点に帰るきっかけともなっていました。

そして何より、センターの皆様とたくさんのお話をすることで、仕事のことや将来のことなど自分の人生について考えさせられるきっかけをもらいました。最初は子どもフェスティバルなどイベントで関わる人たちでしかなかったはずだったのに、気づいたらたくさん寄り添っていた

だいて、レンジャーの活動も見に来ていただいて今後のレンジャーについて話したり、さらには仕事など今後の人生相談もさせていただいたり。空いている時にはセンターにお邪魔させていただけるようなアットホームな空気感で、「おー！あゆ！」っていつも笑顔で迎えてくださるから、執筆している今思えば自分の中で思っていたよりも身近であったかい場所でした。私だけじゃなく誰かにとってもきっとそうで、これから関わる方々にとってもそうなるのではと思います。

まとまりのない文章になってしまいましたが、10年間の出来事や思いはここに書ききれません。

青少年センターは私の子ども会活動を広げそして今の自分をつくったかけがえのないもので、あたたかく迎えてくださった指導者育成課の皆様とはこれからもつながりを持っていられたらと心から思います。今年、私にとって現役最後の子どもフェスティバルは、青少年センターへの感謝溢れる気持ちを胸に参加したいです。改めて10年間、本当にありがとうございました。そしてこれからも、よろしく願いいたします。

あの時はよくも…

体験学習ファシリテーター
二宮 孝



明るい粘着質の川手さんから次々と一段上を目指すリクエストをいただいた。それを継続した田倉さんからもリクエスト責めは続いた。ゲーム（アクティビティ）講

60周年へのメッセージ

習会、プロジェクトアドベンチャーのマインドを伝える指導者講習会、環境教育プログラム3種《Project WILD、Project Learning Tree、Project WET》とその派生プログラム。野外教育関係者対象のオリジナルプログラム。地域の青少年委員対象のプログラム。子ども関連施設の指導者対象プログラム。さらに指導者登録名簿からの紹介で、神奈川県内の市町村での様々な対象への各種プログラム等々。シーズン1回以上のペースで指導者養成にかかわった。

元来東京目黒の私立学校で体育教師をしていた。指導の専門は水泳とスキー。自分がやってきたスポーツは高校・大学とラグビー。それが1996年春にひよんなことから機会を得て、「日本で最初にProject Adventure Programを正式に学校導入した人」という肩書になった。その腕を磨くためファシリテーター研修を求めていたら環境教育プログラムの上級ファシリテーターの資格を持つことになった。更に必要上、応急手当の国際インストラクター資格やKINESIO Taping Trainer、RESCUE 3やCONE、NEALはたまた選択理論心理学と親業訓練協会の学会員や正会員。そしてついにフィンランドヘルシンキからKids Skill Ambassadorの資格を得た。ついでに2006年調理師資格も取得した。料理教室からリスクマネジメント講習や各種研修までテリトリーになった。

神奈川県立青少年センターがあったから、そして次々リクエストで鍛えてくれたからボクが講師として育った・使えるようになった…ということだ。このことがランクアップして今の生業を押し上げてくれている。もちろん形の上では多額の講師謝金を口座に払い込んでいただいている。だがその実は育てていただいた恩がある、月謝を納める立場であったと思うほどだ。「人」は緊張したり修羅場を掻い潜ったり、時に失敗したり恥をかいたりすると飛躍的に成長する。話が下手な「先生」「政治家」を見るにつけ、トライしろ…チャレンジしろ…逃げないで挑め…と思う。

開館60周年記念誌発行にあたり《あの時はよくも…》と感謝の言葉を述べて締めくくりたいと思う。ありがとうございました。そして今後一層の発展を祈念いたします。

私を育てくれた肥沃な土のような存在

公益財団法人よこはまユース
富岡 克之



令和3年度リードアップセミナーでは講師として

私が青少年センターに関わる“きっかけ”となったのは、20年前に参加した「新規青少年行政関係職員研修」（指導者育成課の前身である青少年総合研修センター研修指導課で実施していた研修で、現リードアップセミナー）でした。新人職員として青少年育成に関する知識やスキルも持たない私は、上司の勧めもあり「なんとなく」で参加したのを覚えています。研修は全4回、2回目は清川青少年の家で1泊2日の宿泊研修でした。1回目は関係性づくり、2回目は仲間づくり、3・4回目は青少年理解とグループワークというように、参加者同士のつながりが大切にされていて4回目の研修が終了する頃には、自然と参加者同士の仲間意識が高くなっていました。青少年理解や活動の企画方法など知識やスキルの習得はもちろんですが、職場や市町村を超え、青少年育成を推進していく仲間ができたことが何よりも嬉しいことでした。研修終了後も繋がりは続き、お互いの事例や人材などの情報交換、事業企画の相談など電話一本で相談し合える顔と顔の見える関係は、20年経った今でも続いています。

また、この研修をきっかけに青少年センターの職員の方々とも繋がるのが出来たおかげで、青少年センターの様々な研修や講座にも参加させていただきました。さらに、私が経験を積むごとに講師を務める機会をいただ

いたり、専門部会の委員として活躍の場をいただいたり、青少年センターで学んだものを活かす場も与えていただきました。

私にとって青少年センターは、私という種の発芽を促し、青少年育成に根を張り、実を付けるまでに育ててくれた肥沃な土のようだと感じています。良い土で育った作物は、病気に強く、元気に育ちます。これは人の成長も同じで、青少年がよりよく育つための「土」＝「環境」が何よりも大切だと感じています。今度は私が良い土をつくり次世代の成長を見守っていきたいと思います。

この先もまだまだお世話になるかと思いますが、私を温かく見守ってくれた青少年センターと職員の皆様にご場を借りて感謝を伝えたいと思います。「これまで、そして、これからもありがとうございます。」

祝60周年

日本わらべうた協会理事長
田村 洋子

ちょうど今から60年前、私は劇団「雲」による「罪と罰」を青少年センターで観劇していました。その鮮烈な印象は今も鮮やかによみがえります。そんな感動の時を過ごした青少年センターは当時の中学生にとって沢山の資料を備えた学ぶ場であり友人と語らうにも絶好の場所でした。その頃、眼下の景色は今とはまるで違いました。東横線が走るレンガの壁が長く続き造船所が見えていました。最寄りの市電の停留所「花咲橋」、もみじ坂という名称も何か心優しい場所で海では埋め立て工事が行われている時でした。その後、厚木に転居しましたが子どもや孫のお宮参りなどはやはり伊勢山皇大神宮に参拝しました。そして現在NPO日本わらべうた協会の活動でまた青少年センターとご縁ができたことを本当に嬉しく思います。子ども時代、この横浜で毎日毎日♪あんたがたどこさ、とまりをつき、かごめかごめや花いちもんめで遊んだ日々があればこそ今の活動です。伝承遊びの大切さを伝え続けて30年、今までの歩みが子どもフェスティバルへの参加や「伝承遊びing」の冊子作りに繋がり大きな力をいただきました。これからも神奈川から世界に

向けてはばたく子どもたちの拠点となり、ますます発展しますよう祈るばかりです。今度は孫を連れて通いたいです。おそらく何世代にもわたる人々の共通の場、心に残る場となると思います。

わかりにくい施設であるということ

指導者育成課元職員
田倉 弘明

異動が決まった時、地元の津久井からは遠く、ホールや科学部に相談室まである、やや「わかりにくい」施設だと思っていたこともあり、周囲に新しい職場のことをうまく説明できるか少々不安でした。しかし予想に反し、多くの人が青少年センターのことをよく知っており、センターの知名度の高さに驚きました。

同時に人によってセンターに対する印象やかかわり方がさまざま、その違いもおもしろく感じました。年齢のある人にとっては科学館であり、ある人にとっては児童館の職員としてのスキルを学んだ場所であり、またある人にとってはバレエの発表の晴れ舞台だったといった具合でした。新採用の辞令をもらいに行った場所だと、懐かしそうに話す人もいました。

一方センターに在職中は、県内で青少年にかかわる多くの人と交流を重ねましたが、その中でも、各課の実施する講座や講演会に参加された経験をお持ちの方や、青少年関係の大会や活動発表で来館された方が多数いました。みなさんのお話を聞く中で、私自身がセンターの機能の多様さや歴史について学ぶことのできた7年間でした。

ところが在職中のある時期、私にとっては突然に、センターに複数の機能があることについての見直しが始まりました。「統一性のない施設である」とか、「一つの機能に特化すればいい」といった意見もあったようで、個人的には唐突で乱暴なものに思えました。

もちろん行政の機能や施設のあり方はたえず検討される必要があります。ただこの施設の機能の多様さは、青少年センターが「全国にも例のない青少年のための総合施設」（『青少年センター30年のあゆみ』知事巻頭言より）

60周年へのメッセージ

としてスタートしたことや、その後の県の機構改革の中で青少年関係の各種の機能が集約されてきたことによるものであり、県の青少年行政の歴史の中から必然的に生まれてきたものです。だからこそ、複合施設であること自体を見直すという必要性が、私にはどうしても理解できませんでした。

残念ながら科学部の厚木移転という変化はあったものの、複数の機能による事業の展開という取り組みは維持されることとなりました。青少年を取り巻く環境や課題は絶えず変化し、行政の対応もまた柔軟に変化していく必要があります。しかし神奈川県はすでにほとんどの青少年施設や機関を廃止しており、こうした中では一つの機能に特化するのではなく、多様な課題に対応できる機能を維持し強化することに注力すべきです。センターは、舞台技術のスタッフや青少年サポート課の相談員も含めて、さまざまなスキルを持った青少年のプロがそろった場所であり、その力を活用して、多様なニーズに対応することのできる総合施設として今後も機能していくことを願っています。

ひと言で説明できない、「わかりにくい」施設であって何がいけないのでしょうか。

思い出に残る仕事

指導者育成課元職員
菊地 利津子



私は2015年から5年間指導者育成課に勤務しました。私に関わった仕事で最も思い出に残るものは、2018年か

ら3年間実施したネット依存対策推進事業「チェンジライフキャンプ」です。

異動1年目に青少年問題フォーラムの企画担当となり、当時注目され始めていたネット依存問題を取り上げ、「危ない！ネット依存」という演題で久里浜医療センター院長樋口氏に講演を依頼しました。学生、保護者、行政・教育関係者など様々な立場の方で会場は満席状態で、講演後の質問の多さやアンケート記述からもこの問題についての関心の高さが伺われました。

このフォーラムがきっかけとなり、ネット使用で生活が乱れがちな中学生、高校生を対象に、「チェンジライフキャンプ」を文部科学省委託事業として実施しました。

宿泊施設を持たない青少年センターとしては、このキャンプの実施は簡単なことではなく、施設や、医療関係者を含め、多方面にわたる専門家の方々との連携が必要で、実施までに2年を費やしました。この事業が実施できたのは、関係機関の皆様のご理解ご協力と、館長はじめ青少年センター職員皆さんの、子どものために必要なことに労を惜しまないという熱い思いがあったからだと思っています。

仲間とネットのない環境で過ごすこのキャンプでは、安心できる環境づくりに配慮し、自分を知るためのプログラムやネット依存についての講話も組み込みました。

キャンプ終盤になると子どもたちの目の輝きは増していき、そんな姿に直接触れられたことは、私にとってかけがえのない学びになりました。より良い企画にしようと、日々研究し学びを深めている職員の方々と共に仕事ができただけでなく、何より幸せな時間でした。

将来の不安や、社会の生きにくさなどを抱えながら過ごす若者が、近年増えているように感じます。社会環境は刻々と変化し、ネットの世界に安心感を得られることもあるかと思いますが、リアルな体験や生身の人間とのふれあいから得られるものには変え難いものがあります。

チェンジライフキャンプという事業を経験したことで、スマホをはじめとするデジタルツールと、子どもの健全育成との関係を学び続けることが私のライフワークとなり、退職後、かねてからの夢だった心理職の資格も取りました。この事業が、今後少しでも子どもたちの健やかな育ちに役立つよう、私もできることを模索しています。

これからも青少年センターが、若者にとって、学びや

出会いの場となり、彼らを癒す心の居場所として紅葉坂に存在してくれることを願います。

気がついたら、 もっともよい方法で、自分から行動する

指導者育成課元職員
清水 功



タイトルにある「気がついたら、もっともよい方法で、自分から行動する」とは、青少年が自ら成長する場であった「県立青年の家」で語り継がれてきた言葉で、指導者育成課のボランティア研修の中で度々登場する言葉です。私は、この言葉を胸に学生の頃、子どもを対象にしたキャンプのボランティアや指導者研修に参加し、自然や人とふれあう素晴らしさや大切さを学びました。その後「県立ふれあいの村」でその学びを伝える仕事に18年就き、更に時を経て7年前に「指導者育成課」で再び携わることになりました。

当初は、学校現場とのギャップに戸惑ったところもありましたが、指導者育成課の先輩方々が蓄積してきたノウハウを活かしつつ、タイトルの言葉を胸に、これまでの経験を活かしながら、新たな視点で取り組みました。

特に印象に残っているのは、公民館を利用して3回に渡って「集団遊び、伝承遊び」の指導者研修に取り組んだこと、そしてその「伝承遊び」をテーマに小冊子を製作したこと。学生等を対象に子どもキャンプの企画運営をするボランティア養成で新たな広報先を開拓したり、新たな活動プログラムを学生らと一緒に取り組んだりし

たこと。また研修参加者のその後の活動をレポートしてまとめたり、報告書をより見やすくしたりしてリニューアルしたこと。そして55周年記念の際は、まとめ役を仰せつかり、動画編集や記念品、ポスター、ロゴマークの作成等、いくつかのトラブルに見舞われながらも委員の皆さんと一丸となって新たな取り組みを行ったこと等、印象深い出来事がたくさんありました。

そのような思い出も、いろいろと携わった方々のアイデアやサポート、そして笑顔があったからであり、職員の皆さんをはじめ、市町村青少年担当の皆さん、県子ども会連絡協議会の役員・ジュニアリーダーの皆さん、各関係施設の職員・様々な研修講師・参加者の皆さん等、新たな人脈も広がりました。この場を借りて支えてくださった皆さんに感謝申し上げます。

「気がついたら、もっともよい方法で、自ら行動する」ことにより、培われるコミュニケーション能力や自己肯定感、自己有用感等は、今の時代を生きる若者にとって、とても重要なことだと感じています。そして時間が経っても、その学びが存在し続けているのは、研修事業を通してその学びを実感できる青少年センターがあるからだと思います。今後も絶やすことなく研修事業を続けていただくことを祈念し、記念誌に寄せさせていただきました。

最後になりますが、青少年センター開館60周年、おめでとうございます。これからも青少年センターの取組みを陰ながら応援させていただきます。

社会人として幸せな経験

指導者育成課元職員
一戸 文崇

指導者育成課で5年働いている中で、仕事に「自分の色をほんの少し付け足す」おもしろさを味わいました。それは、今でも仕事のベースとなる考えになっています。特にもう1人の職員「もっち」と子ども施設の指導員セミナーを社会人成り立てで担当できたことは、今思い出してもとても幸せな経験だったと感じます。

このセミナーの担当になって企画を行うにあたり、2人でよく話をしたのを覚えています。参加者のアンケー

60周年へのメッセージ

ト等から、たくさんの困り事があって「すぐにでも使える遊びや対応=技術」を求められているのがわかる。でも企画者として客観的に考えると「子ども施設の職員さんには、こんな視点=マインド」も持ってもらいたい。遊びや子どもとの関わり方等のニーズは、たくさん要望を書いていただけるので、すぐにアイデアを見つけることが出来ます。そこから一歩進んで、「本当に困っていること、大変なことはなんなのだろう」と考え企画を作ってきました。

このセミナーが良かったのは、1年間で4講座を2回ずつの計8回も行えた事です。おかげで4講座の内1講座は、企画者としての思いを強めにした内容を行う事が出来ました。思いを形にするために新しい講師を探して、お呼びする事もしました。また、今までつながりのある講師にも、企画者として分析し考えた事を打ち合わせで伝えました。講師に内容をお任せにするのではなく、「こんな内容にしたい」と一緒にセミナーを作りました。

こんなチャレンジをしたからこそ「自分たちで作った」と毎年誇れる仕事が出来ていたと思います。分析をして、自分の考えを少しつけ足すこと、つまり企画に自分の色を少しつけるおもしろさを社会人なりたてで経験できたことは、とても幸せな事です。この経験があるからこそ、今も仕事に面白みを見つける事が出来ています。

あたたかい場所

指導者育成課元職員
元山 愛梨

私は青少年センターの指導者育成課に勤務していました。

地域活性化プロジェクトという事業を同僚と企画した時には、どのような研修を企画すれば、地域の青少年に関わる指導者の方の力になるか、アイデアを出し合い、企画し、講師依頼をしたり、募集のチラシを作成したりと、とても大変でしたが、困ったときには指導者育成課の皆さんがいつでも親身に相談にのってくれました。参加者の方から研修に参加してよかったとお言葉をいただいたときは、本当に嬉しかったことを今でもよく覚えて

います。

また、自然の中で活動することも多くありました。それぞれの研修では、体験を大切にしたプログラムが組まれていました。「聞いたことは忘れる。見たことは覚えているかもしれない。体験したことはわかる。」という言葉通り、私も参加者の方と一緒に体験を通して様々なことを学びました。例えば、カヌーの乗り方、薪を割って火を起こす方法、三線やウクレレ、ギターなどの楽器の弾き方、様々なコミュニケーションゲームを通して、たくさんの人とすぐに心を開いて打ち解け合えることなど…本当にたくさんのことを学びました。

こんなにも様々なことにチャレンジできたのは、青少年センターで様々な人と出会い、支えていただいたからこそだと思います。

青少年センターは私にとって、思い出だけであたたかい気持ちになる場所です。青少年センターでどんな時もみなさんと一緒に笑い合いながら過ごしたあの日々が今でも私の背中をそっと支えてくれています。

青少年センターと私

指導者育成課元職員
室屋 彰彦



私が青少年センターに配属になったのは平成23年4月。丁度、東日本大震災が発生して1カ月足らず。どんな仕事をするのかも分からずに不安なまま赴任したことを昨日の日のことのように思い出す。しかし、そこで待ち受けていた仕事は、私の想像していた行政職とは180度異なる

世界。これといった知識も技術もなかったが、「向き不向きよりも前向き」にと自分に言い聞かせながら、日々の業務に当たっていた。その結果、得られた知識や技術、仕事に向かう姿勢は今の仕事や、家族を大切に自分の基礎となっている。

平成26年4月に現任校に異動して今年で9年目。生徒や若い同僚にこの青少年センターで学んだ言葉の力や知識、技術を良い意味で伝染させていくことが今の私のライフワークになっている。とても充実した日々を過ごしている。

今の自分になれたのは、青少年センターで私にご指導いただいた全ての方々のおかげである。川手課長を始め、中川さんや栗田さんなど、右も左も分からない自分に1つ1つ丁寧に指導いただいたことが、今の自分のストロングポイントである。

最後に、私が主担当の研修事業の際によく話した山本五十六の話を今後も忘れないようにご紹介させていただき、結びとする。

「やってみせ、言って聞かせて、やらせてみて、ホメてやらねば、人は動かじ。」

「話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば、人は育たず。」

「やっている、姿を感謝で見守って、信頼せねば、人は実らず。」

ゆく河の流れは絶えずして、 しかももとの水にあらず

元青少年支援部長
高橋 和美

青少年センター開館60周年、おめでとうございます。



私がセンターと出会ったのは、中学2年生の時に、約50人のクラスメイトと観光バスに揺られて藤沢から横浜に行きました。プラネタリウムを見て、理科の実験をしたことを記憶しています。

在職して知ったことですが、

これは全県の中学2年生全員が参加する一日青少年センターという事業で、バス代を含む経費が予算化されました。今思うと県は青少年育成に力を入れてきたんですね。

高校生になると、演劇鑑賞でホールを訪れたり、友人が「会館部の美術教室参加している」と聞いたこともありました。

県に就職し、今は閉鎖されたいいくつかの青少年会館や青少年の家などの勤務を経て、青少年センターで働くことになるとは夢にも思いませんでした。

特に印象に残っているのは「不登校・ひきこもりの子ども・若者を支えるNPOの方々との協働でサポートプラザを立ち上げたこと」「様々な活動に役立つアイスブレイキングの実践手引きDVDを、相棒と知恵を出し合い、試行錯誤を重ねて、作成・発刊にこぎつけたこと」などです。

この間、子ども・若者やボランティアの方々との交流し、諸先輩方の助言や指導をいただき、若い職員の行動力や新しい知識・技術に目を見張り、教員・福祉職や事務職などから異動してきた方が慣れない職場環境の中で持てる力を発揮する、など多くの人々と関わりながら業務に取り組みました。

もちろん、山を下って、野毛の夜を堪能したのは、言うまでもありません。

様々な人々が、入れ替わり立ち代わって関わりながら、子ども・若者の支援の流れが続いてきました。激しい瀬や深い淵みもありましたが、唯一残った施設である青少年センターが、子ども・若者の未来に向かって、これまで以上に取り組みを深め、愛されていくことを願っています。

青少年センターと共に19年

青少年センター指導者育成課 主任専門員
川手 隆生

私が青少年センター（以下センター）に赴任したのは平成16年3月末です。青少年総合研修センター（以下青総研）の廃止にともないセンターに機能を集約すること

60周年へのメッセージ

になったからです。青総研にあった研修指導課が指導者育成課に、調査研究課が青少年サポート課となって4月からスタートすることになりました。旧紅葉ヶ丘青少年会館の一室で1年4ヶ月余りを過ごし、平成17年7月にリニューアルしたセンターに移転しました。

当時科学部、舞台芸術部、管理部そして青少年支援部（指導者育成課と青少年サポート課）という組織でスタートすることになりました。

科学部は元々センターにあった組織を再編したもので、舞台芸術部は当時かながわドームシアター（現在のKAATの敷地にあった）で活動していました。新参者として、センターに編入されたこともあり、少し肩身が狭く不安なスタートだったことを覚えています。

課の名前は変わっても業務内容はほとんど変わりありません。青少年に体験学習の場を提供する支援・指導者の育成をするというものです。それが市町村、青少年関係団体等の対外的には、課の名が知られておらず苦労しました。まずは積極的に外に出て営業しながら、PRしていきました。さらに共催事業を増やし、市町村・団体への活動支援に努め、徐々に対外的に認知されるようになりました。

事業内容は、単なる講演会・講義形式ではなくワークショップ形式とし、双方向で実践的な内容として、PA系プログラム、コーチング、インプロ等を積極的に取り入れました。研修参加者には大変好評で、参加前よりも終了後の評価はほぼ全員が高くなっています。

スタート当初は他課との交流があまりなく、各課が別々の業務をこなしていて、一体感があまりありませんでした。当時の当課職員は酒飲みが多く、野毛に繰り出して他課の一部職員と交流していました。そこへ中川賢彦さんが当課に異動してきて、楽器練習部という部活動が始まってから、昼休みになると当課事務室で三線、ウクレレ、ギターの音色が流れるようになりました。他課からも参加するようになり、部員が10人くらいになったとき、小さな居酒屋を貸し切りで使わせてもらい、第1回演奏会を行いました。まだまだ未熟な演奏でしたが、とても楽しい思い出です。そして歓送迎会、忘年会、年に1回のメルヘンライブなどで日頃練習した成果を発表する機会を得て、楽しく活動していました。1階のメルヘンはコロナ禍にあって閉店を余儀なくされ、とても寂しい限



りです。また歓送迎会、忘年会は3年間開かれていません。部活動は発表する場がなく、現在細々と昼休みの練習を続けているという状況です。

仕事の上での他課との交流というと、何と云っても子どもフェスティバルでしょう。唯一の全館行事であり、他課職員と力を合わせてイベントを作り上げていく作業の中で、交流が生まれました。終了後の打ち上げも毎回楽しみでした。他にもお互いの事業で協力しあうことも増えていきました。

そのような中で、平成30年に科学部がプロミティあつぎに移転したことで、紅葉坂のセンターの多様な機能の一部が失われてしまい残念です。来館された方が青少年に関わるいろいろな事業や機能に一施設で触れることができなくなってしまいました。

さて私が青少年行政に携わって32年、センター経験は19年目になります。その間、市町村・団体からの依頼で、多くの研修会の講師を務め、地域で活動する青少年支援・指導者の育成と活動支援に力を尽くしてきました。そしてセンターは令和4年で60周年を迎えました。青少年にとって、多様な体験は、日々成長し社会に出て生きていくための糧になります。その機会が奪われないように、今後も各課の特性を生かした魅力ある事業を展開し、センターが輝き続けて欲しいと思います。

県民の傍にある全世代の「学び」と「関わり」の場

NPO法人リロード理事長
池田 正則

開館60周年、おめでとうございます。

年齢を重ねるにつれて、訪問する際の紅葉坂の傾斜がキツくなっていますが…想えば私にとって、子ども時代から今現在もずっと「そこにある」施設です。

子ども時代から青年期にかけては、以前本館にあった科学館とプラネタリウムに毎月数度訪れていて、体感する科学知識を科学館で学び、プラネタリウムでは代わりに説明できるほど学び、友人などに自然体験の機会などに講釈をしていたものです。周辺には分館、第二分館、別館もあり、工作室・音楽室やトレーニングルームも利用していました。私の青年期までの様々な学びと過ごす時間の中の多くの場面に青少年センターがありました。

時は過ぎ、社会人になってしばらくは青少年センターに関わる時間はほとんどなくなってしまい、青少年センターそのものも改築や周辺施設の撤去などもあり、「思い出の施設」になりつつあったのですが…奇遇にも特定非営利活動促進法（NPO法）が成立した後、NPOの職員になった私に、縁あって青少年センターが別の形で身近な施設になりました。青少年センターの機能にNPO支援が置かれ、他NPOとの交流・会合やイベントなどで活用するようになったのです。若者の自立支援に取り組む今は、青少年サポート課に様々な取り組みを協働させてもらう機会を創出してもらっています。合わせて青少年センターが神奈川県文化発信の拠点にもなっています。

姿や機能は時代の変遷によって変化していったとしても、県民の傍にあり、年代に依ることなく、学びや人と人との関わりが産まれる場所であり続ける青少年センターが、これからも様々な人にとって「そこにある公共施設」として存在していくことを祈念します。

フリ・フリ・フェスタは私たちを励ましてくれる祝祭の日

NPO法人楠の木学園学園長
神田 誠一郎

青少年センター開館60周年おめでとうございます。毎年9月にこちらを会場として行っているフリースクールとフリースペースのお祭り「フリ・フリ・フェスタ」は2005年に始まってから18年間続けられており、楠の木学園も開始時よりずっと参加させていただいてきました。近隣の子どもたちや不登校当事者、その支援者たちにも「県内にいろんな支援団体があるよー」とアピールすることが当然この催しの大きな目的の一つですが、私がこのお祭りに参加していて感じることは、まず他の団体の方たちと交流できることの楽しさです。

平日の夜、仕事が終わってから紅葉坂を息を切らせて上っていくと青少年サポート課のみなさまが笑顔で迎えて下さり、各団体が近況を語り合いながら、本番に向けての打ち合わせを進めていきます。半年以上も前から毎月のように準備を重ねていくのですが、インターネットでの告知を始めるためにツイッターを使えるようになるそのやり方を教わったり、Youtube用の映像を作ったりと、常に新しい課題が出てくるので、「前回と同じようにやれば」というような楽な展開になることがなく、こちらも新鮮な気持ちで取り組み続けることが必要となります。新しいことやわからないことには不安が伴いますが、しかしそこはサポート課の担当のみなさまが本当に献身的に寄り添うようにお手伝い下さるので、フリ・フリ・フェスタ開催に向けての準備を重ねることは、ストレスよりも喜びが勝ったものとなっています。

そうして本番の日を迎えるのですが、各団体の飲食物やフリマなどの出店や展示物を一同楽しみにしていますし、ホールでの催しには楠の木学園でも毎年のように卒業生グループが和太鼓と大道芸の公演をさせていただいています。回り舞台まで使わせていただき、音響効果も抜群の会場は年に一度のまさしく「晴れの舞台」です。次回またこの会場で演奏できることを励みにして、私たちはさらに練習を続けていきます。

一昨年、昨年と流行病への対応で行われませんでした

60周年へのメッセージ

が、今年からまたフリ・フリ・フェスタが回を重ねてゆけますようにと心から願っております。青少年センターのみなさま本当にありがとうございます。これからもみなさまのお仕事が若者たちの育ちを支え、生きる元気を培っていく助けとなりますことを！とお祈り申し上げます。これからもどうぞよろしく願いいたします。

東日本大震災時に遭遇して

青少年サポート課元職員
丹波 進

2010年4月から再任用期間を含め2020年3月まで青少年サポート課に勤務中の思い出は多々ありますが、順番をつけろと言われるれば、迷わず、着任翌年3月の東日本大震災に見舞われたことです。

2005年にセンターの大規模改築が済んでいたため、建物本体は、無事で、また、ロッカーが倒れて負傷者が出ることもなかったのですが、揺れている間は、早く収まってくれと願うばかりでした。一部の床や天体望遠鏡、プラネタリウムを撤去するなどして建物を軽くして耐震性を高める改修が2005年に終わっていなかったら負傷者がでていたと思います。

2回目の揺れが治まって、課員の一人に、センターから歩いて5分ほどの戸部バス停前のスーパーマーケットに食料品の買い出しを頼みました。店は本部の指示で地震直後に閉店ながら、道の反対側にある酒屋さんでカップめんを10個ほど確保して戻ってくれました。

幸いなことに、管理課長のご尽力で、当時一階で営業をしていた喫茶店からあったかいご飯を調達できました。それをおにぎりにして職員の夜食としました。なお、カップラーメンは、みなとみらい地区のタワーマンションから赤ちゃんを含む小さな子どもを連れて避難して来て、一夜をセンターで過ごした、二組の家族の役に立ちました。

今になって振り返ればこうすればよかったと気づくことがひとつあります。そんなこと気づかないのと言われてそうですが、非常事態に直面して、事前に想定していないと、咄嗟に頭に浮かばないものです。

それは、当時センターの隣にあった元県立紅葉ヶ丘高等職業訓練校の建物内に備蓄してあった毛布の移動です。エレベータが動かない中、かなりの重さとなる、毛布5枚入りの真空パックを階段で、帰宅困難者を収容した三階まで職員が運び上げました。

帰宅困難者の中には、元気な若者も多くいたのですが、彼らの中からボランティアを募れば、色々なことに対応せざるを得ない職員が何度も往復するより時間が大幅に節減できたはずだと思っています。避難所の運営マニュアルを整備していく中で、自治体が考慮しておくべき視点の一つかと考えております。

最後に、青少年行政が、時代の変化の中で、変貌して行く中で、箱物行政と揶揄されることもありますが、目に見える形で拠点となる立派な施設があることは、官民を問わず青少年の育成に関わる全ての人にとって頼もしい拠り所でありますので、ハード面、ソフト面での発展を期待しております。

夕暮れのセンター界限

臨床心理士
辻 隆造

青少年センター開館60周年誠におめでとうございます。心からお祝い申し上げます。青少年サポート課との十数年の関わりの中で思い出をたどると、センター界限の横浜の魅力が忘れられません。2009年（平成21年）から隔月でセンターを訪問し、相談関係職員との関わりを持つ機会を得ていました。往復3時間経路の帰路、夕暮れのセンター界限を散策する楽しみは、訪問が待ち遠しくなる魅力にあふれていました。

センターは、掃部山公園、野毛山公園、伊勢山皇大神宮が祀られ桜木町方面を見渡せる小高い丘等、都市型の自然が保たれている環境にあります。仕事を終えてセンター前の紅葉坂を登るのか下るのかはその日の気分に従ってました。

坂を上ると野毛山動物園、横浜中央図書館を経て日ノ出町、黄金町から伊勢佐木モール、野毛の飲食街にたどり着く道々は楽しいコースでした。映画を見るなら大岡

川沿いのミニシアター横浜シネマ・ジャック&ベティで、シネコンでは決して上映しない名画を見るのが楽しみでした。坂を下ると、最寄りの桜木町駅から横浜港周辺のみなとみらい21地区、大型客船の停泊する大棧橋と関内駅の目の前に横浜スタジアム、県庁へ向かう日本大通りから馬車道、中華街、元町と時代の香りを残しながら変化し続ける町並みに魅了されます。

日本の文明開化と共に歩んでいるこの町と同様に、これからの青少年センターのますますの発展を願ってやみません。

青少年センターとの出会いと今

NPO法人フリースクール鈴蘭学園理事長
中村 鳴美



フリ・フリ・フェスタ2022の様子

今から11年くらい前、神奈川県にあるフリースクールが集まって行うフリーマーケット（フリ・フリ・フリマ）への参加が、私と青少年センターとの出会いでした。鈴蘭学園は神奈川県学校・フリースクール等連携協議会の一員になってすぐで、まだ右も左もわからなかった時期でした。当時は、鈴蘭学園に入って来る子どもの数も少なく、参加メンバーは、子ども1名とスタッフ1名だけでした。一年間の開催準備期間も含めて、私には初めての経験でした。そこで県内で活動する他のフリースクールさんとの出会いもありました。様々なことが新鮮な上、周りを見るとフリースクールを代表する大御所の方々が、

「一体何をどう話していいのやら…」。開催までに数回行われる打ち合わせで、毎回緊張しっぱなしでした。そんな中、優しく声をかけて下さったのが、青少年センターのスタッフの皆さま方でした。本当に、ありがたかったです。初めてのフリーマーケットは緊張で全然覚えていませんが、鈴蘭学園も段々と子どもの数が増えていき、フリーマーケット参加3年目では、多少の売り上げもありました。また子どもやスタッフも増えてきた頃の様子は今も鮮明に覚えています。右往左往する鈴蘭学園の様子を見かねてか、青少年センターのスタッフ皆さんは、いつもあたたかい目で見守って下さり、時には助けて頂いたりして、本当にお世話になりました。今なおこうやって、フリフェスを続けていられるのは、青少年センターの皆さんのあたたかいお心遣いのおかげだと思っています。本当にありがとうございます。今では、フリフェスは鈴蘭学園の恒例行事の一つとなっています。

もう一つ、鈴蘭学園では青少年センターとの関わりがあります。7年ほど前から、「ひきこもり地域理解促進事業」というものを共催しています。鈴蘭学園では、協力して下さっているカウンセラーの先生にお願いし、ひきこもりの親御さん、当事者や関係者へ向けた講演会という形で行っています。本来、鈴蘭学園は不登校児童の居場所としての活動が中心ですが、この事業に携わってから、ひきこもりの方の支援も並行して考えていかなければならないとの気づきをいただきました。不登校やひきこもりが社会課題として認識される中で、これらの課題は鈴蘭学園だけでは到底解決できるものではありません。関係各所との連携や様々な事業に関わることが、当事者の方の未来へと橋渡しをするためには必要なのだと、青少年センターの事業を通して学びました。ありがとうございます。

このような形で青少年センターとの関わりを持たれたことを、心よりありがたく思っています。これから先も子どもたちの健全育成のため、青少年センターはなくてはならない拠点であり続けるでしょう。

60周年へのメッセージ

不登校・ひきこもり支援に果たした 青少年センターの役割

認定NPO法人フリースペースたまりば理事長
西野 博之

神奈川県立青少年センター開館60周年おめでとうございます。

私と青少年センターとのつながりは、青少年サポートプラザがセンターの第二分館にあった頃からだったでしょうか。不登校・ひきこもり支援は、行政の力だけではなかなかいい方向に進まない、NPOとの連携が必要だ、という空気が広まる中で、青少年課がNPOと連携のための会議を呼びかけました。その会場となったのが第二分館だったと記憶しています。県内からたくさんのフリースクール・フリースペース・親の会などが参加しました。参加団体からたくさんの要望が出され、この会議をきっかけとして、2004年から「神奈川県フリースペース等事業費補助金」の制度も始まりました。フリースクール等で大学生がボランティアとして活動するための説明会や研修も、この頃からやっていたように思います。ここで出会った学生の中には、私たちのフリースペースで活動したのち、今では自分で法人を立ち上げ、障害福祉の分野で活躍するようになった人もいます。またその後、第2分館が閉館になり、近所にあったセンター別館を改築して、そこに青少年サポートプラザが設置されるようになったと記憶しています。新しくなった建物の中で、フリースクール同士の情報交換や交流、相談などを行うようになりました。夜も開いていたので、会社帰りの父親の相談や、フリースクール等の立ち上げ支援、市区町村の行政職員たちからの様々な相談・協議なども行ないました。その時、勤務を終えて訪ねてきた熱意ある福祉事務所の職員との出会いがきっかけで、その後、川崎若者就労・生活自立支援センターが立ち上がることにもなりました。また2004年からやっていた「フリ・フリ・フリマ」（フリースクール・フリースペース・フリーマーケット）はやがて大規模な改築を終えた青少年センター（本館）に引き継がれ、「フリ・フリ・フェスタ」として今に継続されています。青少年サポートプラザの活動がセンター本館に移ったこともあり、立派なホールを使って

フリースクール・スペースに通う若者たちの演奏など、活動発表の機会がもてるようになったことも大きな喜びでした。

またNPO相談・支援アドバイザーとして、新しいサポートプラザで面接相談などを担当しました。たくさんの相談ケースを担当させていただきましたが、毎週この場でお会いする警察から出向で来られていた相談員の方や、心理の専門職の人などと、専門領域を横断して、ケースの検討・相談もしやすい環境が生まれ、サポート課の職員の人たちとも、公民の垣根を超えて自由に語り合えた時間は、何にもかえがたい豊かな時間となりました。貴重な機会を与えていただいたことに、今でも感謝しています。機会があれば、あの当時を囲んだ方たちと同窓会でもやりたい気分です。ありがとうございました。余談ではありますが、私が文部科学省から委嘱を受け「フリースクール等に関する検討会議」の委員をしていた頃、2006年に全国に先駆けてつくられた神奈川県教育委員会とNPOの連携事例である「神奈川県学校・フリースクール等連携協議会」のことを国に報告させていただきましたが、行政とNPOが手を組んで不登校・ひきこもりの支援に乗り出したのは、この青少年課（青少年サポート課）の取り組みが先行してあったからできたことであることは、付け加えさせていただきます。

青少年センターの思い出

「ひかりの広場」代表
松本 光世

60周年おめでとうございます。

その半分の約30年前からの12年間（1992/H4～2004/H16）、非常勤職員として当時の神奈川県青少年総合研修センターに勤務した後、統合により、県立青少年センターには、大規模リニューアル工事前後の3年間（2004/H16～2007/H19）、お世話になりました。

その後、現在までの15年間（2007～2022）は、登録団体『ひかりの広場』の一員として、「フリ・フリ・フェスタ」や「コミュニケーション講座」などに参加させていただいています。



フリ・フリ・フェスタ2016「ひかりの広場」の
ワークショップコーナーで

勤務時代は、不登校・ひきこもりなどの経験者の若者や、ご家族・支援者などの関係者が、アート表現や五感を通してちがいを楽しみながらともに学び合う、体験型の講座「青少年とのよりよいコミュニケーションのためのワークショップ」などを担当させていただきました。

その中では、演劇ワークショップで舞台を使わせていただいたり、ポラロイドカメラで周囲の撮影体験をして大画面で鑑賞し合ったり…、青少年センターならではのプログラムも企画し、舞台関係・科学関係を含む多くの皆様にご協力いただきました。

当時の参加者の皆さんの中には、「フリフェス」で一緒に活動している団体の方や、当事者としての経験を活かして貴重な活動をしている方などもおられ、現在も交流が続いています。

また、2005年には、講座の参加者有志により「青少年とのよりよいコミュニケーションのためのワークショップ研究サークル」として『ひかりの広場』が発足したため、非常勤職員退職後も登録団体の利用者の立場で引き続きお世話になり、現在に至っています。

公私ともに、さまざまにつながりに感謝しつつ、今後も紅葉坂を上り続けたいと思います。

初の登録団体、初の研修室使用団体

ヒューマン・スタジオ代表兼相談員
丸山 康彦



2019年5月、研修室2をお借りして開催した
「不登校・ひきこもりセミナー2019」のひとコマ

別棟に青少年サポートプラザが開設されると同時に、他団体とともに初めて団体登録。

印刷機を備えたワーキングコーナーや貸部屋を使用させていただき、チラシや機関紙の印刷、イベントや家族会の開催、といった業務の実施に大きな力を与えてくださいました。

時は経って同プラザが本館に移転して早々、拙著『不登校・ひきこもりが終わるとき』の出版記念イベントを研修室1をお借りして開催しました。これは研修室使用団体第1号だとうかがいました。

印刷や当事者会などへの参加、そしてフリ・フリ・フェスタで来館するたび、青少年サポート課の職員や県内の不登校・ひきこもり等の関係団体の方と再会できることや関係情報を入手して相談業務に役立てられることが魅力です。そんな青少年センターは、私の第2の仕事場になっています。

ここに開館60周年をお祝いし、お世話になりましたことを感謝するとともに、今後とも末永く利用させていただきたく、引き続きよろしく願い申し上げます。

60周年へのメッセージ

不登校・ひきこもり支援拠点として

NPO法人リロード理事・NPO法人楠の木学園
前理事長 武藤 啓司

2002年神奈川県ボランティア21の負担金募集の第1期に「ひきこもり支援協働事業」として応募し2期6年、助成してもらえたのですが、そこまで基金支援が終了となってしまいました。

「ひきこもり支援活動」はまだ緒に就いたばかり、支援を期待する当事者や保護者がいっぱいです。本来「県青少年課との協働事業」です。事業の継続の責任は青少年課にもあるはずと泣きつきました。青少年課の担当の皆様も「何とかしたいが…」とご苦労してくださいました。

2008年、現在の本館改修が完了するまでセンターであった木造平屋の青少年センター別館（本館）の使用が認められました。そこでシンポジウム、県内のNPOなどの支援団体の紹介などに利用させてもらいました。イベントのない通常の日にはひきこもりの当事者が集まり、おしゃべりやゲーム、卓球やバドミントンなど日頃運動不足の若者たちにはありがたい身体的活動のできる場でもありました。そこでひきこもり支援についての多くのことを学びました。その一つに、卓球やバドミントンのラリーで、相手への配慮したプレーがみられるようになっていったことです。「<自立>とは自分だけでなく、他者との関係性ももてるようになること」と教えられたのでした。

その後別館は売却され、2008年別館が閉鎖され、「もみじ坂会館」といわれていた道路を隔てた隣の建物に引っ越すことになりました。そこは「青少年サポートプラザ」としてひきこもりの若者たちが利用しやすい施設として私たちの意見をいろいろと取り入れてくださいました。初めて参加する人も入りやすい入口（受付）、相談・面談室、調理場、パソコン教室、県内の支援諸団体のロッカー設置など利用しやすい施設としてのご苦労をいただきました。受付の仕事をひきこもり経験者にさせてもらい、その後の社会参加へのステップとさせていただきます。

また、本館の完成により1階にレストラン「メルヘン」が出来、マスターの原田さんが、別館に来ているひきこもりの若者たちの就労体験の場としてのご協力をいただき、そこでマネージャーになったり、店員として働くことができるようになった人など多くの若者を育てていただきました。

別館は2012年には、「かながわ子ども・若者総合相談センター」と位置付けられましたが、2014年にはこの建物も売却の対象となり、廃館。「青少年の自立支援活動」の全てが本館に集約されることになりました。

本館でも「子ども・若者総合相談センター」としての活動が続けられました。臨床心理士、私たちのような民間フリースクール等のスタッフ、県警の少年課の警官、そしてスーパーバイザーとして精神科の医師などのチームだったと思います。

その後も毎年「フリ・フリ・フェスタ」という県内の支援団体の集うイベントの開催など不登校・ひきこもり支援活動の神奈川県を中心としての支えとなってきています。

青少年センターのここがすごい！

NPO法人子どもと生活文化協会（CLCA）顧問
和田 重宏

僕が青少年センターでの相談業務に関わることになったきっかけは、県の呼びかけで県内のフリースクール、リースペースの約60団体が集まった会合でした。その後、官民協働での相談事業がスタートしました。現在では当たり前となっている、相談者の問題解決には複数の専門機関の協力がなければ実現しないということを、青少年センターが「さきかけて実施した意義は大きい」と思います。実際に、県警や児童相談所・保健所・学校などからの出向、それに加えて僕のような現在進行形でNPOを主宰している支援者たち、さらに県が採用している心理職の専門家と言ったさまざまな人たちが一堂に会しての取り組みが行われていました。精神科のドクターや臨床心理士による事例検討会も定期的で開催され、充実した相談事業が平成十六年から実施されていたことは

前例のない画期的なことだったと思います。

その後、このことを参考にして県の教育委員会でも「神奈川県学校・フリースクール等連携協議会」が発足し、平成十八年度から官民協働の「不登校相談会・進路情報説明会」が県内各地で開催されるようになり、全国にさがかけて実施され現在に至っています。そのきっかけを作ったのが、青少年センターが始めた相談事業だったのだと思います。

現在継続している「フリフェス」の始め頃の思い出も記憶に残っています。資金不足に喘いでいたフリースクール・フリースペースが収益を得るためと、互いの交流の場を持つことの目的で企画しました。それを実現するために当時の課長が周辺のマンションや学校に出向いて宣伝してくれ、僕が実行委員長を仰せつかり、うちのCLCAからも百名を超える人たちが小田原から参加しました。出し物は小田原名産の「魚の干物」であり、「おだわらおでん」の屋台でした。その後本館の耐震補強工事が終了した時の「フェスタ」への参加を最後に、一人

往復二千円の交通費がかかる遠方からの参加を残念ながら控えるようになっていきます。

現在マンションが建っている所にあった「分館」を相談事業で展開していた時代には、それまで宿泊施設だった建物でしたので、東大の経済学者を招いて「三日坊主学校」と称した二泊三日の講座を開いたり、今で言うマインドフルネスの「正坐会」や狂言師による「稽古」を定期的に行っていました。さらに科学部で行っていた「ロボット教室」に二人の不登校の中学生が通い、その後、彼らはそれぞれの道を拓いて立派に自立していますし、最近では青少年センターの演劇指導を受けたのがきっかけで、能楽師の卵になり、国立能楽堂の舞台に立っている女の子もいます。

このようなことから、神奈川県西の端っこにあって目立たないNPO法人CLCAにとっての青少年センターはとても大きな存在であったこと、そして現在もそのような存在であることを実感し、深く感謝しています。

column

クスノキは見えていた！

青少年センターの正面にこんもりと葉を茂らせている大きな木は楠(クスノキ)。

紅葉ヶ丘の急な坂を登ってくると、まずこの木が目飛び込んで来て、来館者を迎えてくれます。

60周年を記念したロゴにもこのクスノキを彷彿とされる大きな木がデザインされていますが、さて、この巨大なクスノキ。いったいいつからここにあるのでしょうか？

浦賀にペリーが四隻の黒船を率いてやってきたのが1853年。そのあとすぐ、横浜の港が開港した頃に、この青少年センターがあった付近一帯に「神奈川奉行所」が設置されたのですが、なんと、その頃の浮世絵に既にこのクスノキらしき木が立っ

ている……ということ、このクスノキ、少なくとも樹齢170年にはなるという計算です。

神奈川奉行所が廃止された後には、ここには神奈川県職員の公舎が建てられ、そして、60年前に青少年センターが開館したわけですが、その後もずっとこの地に立ち続けた、大きなクスノキ。

青少年センターが60周年を迎えたことを記念して、このクスノキの葉を葉(しおり)にして来館した皆さまにお配りしました。

これからも、青少年センターをはじめとする紅葉ヶ丘一帯の地域のシンボルとして、私たちが静かに見守ってくれることでしょう。



60周年へのメッセージ

青少年センターでの業務以外の思い出

学芸部科学第二課元職員（1967～1971年）
若宮 崇令

私は新卒で昭和42年4月より4年4ヶ月間、学芸部科学第二課に所属し河原郁夫先生より厳しくプラネタリウム解説のイロハを教えてもらい、川崎市青少年科学館に異動した。当時、平日は「中学2年生1日青少年センター」、土日は一般来館者の対応に追われかなり忙しい毎日だった。宿直や日直もあり、自分の当番以外にも若いということで率先して代わりに勤務したりした。プラネタリウムのことは誰か書いてくれると思うので、当時の仕事を離れた楽しかった職員の厚生活動の思い出に触れてみる。色々なクラブ活動があったが、私は卓球部と文芸部に入った。卓球は地下のボイラー室に卓球台が置いてあり、昼休みになるとそこへ行った。毎日男女10人くらいが集まってゲームをするのが練習だった。初心者のはラケットの振り方から教わった。やがて自分のラケットを買い、自分でラバー張り、少しずつ上手になった。とは言え、上手な人はA組で、私はB組だった。メンバーは20人程でボイラー、電気技術、電話交換等の担当者、事務員等いろいろだったが、比較的若い人が多く青少年センターのいろいろな部署からランダムに集まっていた。お陰で幅広く各部署の人たちと仲良くすることが出来た。私はA組になれなかったがB組で年1回の大会で1位になり、小さな優勝カップをもらったのが今手元にあり、思い出とともに大切にしている。文芸部に入ったのは、大学在学中、演劇研究部に所属して戯曲分析や公演をしていたので、演劇や文学に興味があったからである。文芸部のメンバーは10人不足だったように記憶しているが、月に1～2回集まって小説を読み合い、詩や随筆、創作などもした。メンバーの中に私と同年輩で仲良くしてもらった舞台担当の斉田氏がいた。当時はガリ版を切って謄写印刷をする時代、彼の特技はガリ切だったので、彼に依頼して集めた原稿で薄っぺらだが文集「あゆみ」を発行した。4年4ヶ月の私の勤務は短い間だったが2冊発行した。その2冊も手元に大切に保存している。読み直すと若い頃のほろ苦い記憶が蘇ってくる。あ

と年1回職員親睦のボーリング大会があった。ボーリング部があったかどうか記憶は定かではないが、私はハンディをもらっていたが優勝し、小さなトロフィーをもらった。これも大切に手元においている。また若い男子が集まり、音楽の先生の指導で合唱の練習もした。忙しい仕事の合間、昼休み時間を利用したり、勤務のない月曜の休館日に活動した。年1回の館親睦会の日帰り旅行、また誘い合って山登りをしたり海釣りに出かけたり、職員の交流は楽しく、厳しい仕事以外にいろいろ学ばせてもらった。青少年センターが開館して間もない頃の黎明期に勤務させてもらった。思い返すと、全国に先駆けて実施した「1日青少年センター」など、館全体が若く活気に満ちている中で、活発な厚生活動を通して職員同士が非常に仲良く団結していたような気がする。



頂いたトロフィーと発行した文芸誌

私も成長させてくれた一日体験活動 ～子どもたちのために全力準備の科学教室～

神奈川県立希望ヶ丘高等学校 校長
科学課元職員（1987～1988年） 柴田 功

この度は神奈川県立青少年センター創立60周年おめでとうございます。長い間、その名の通り、本県の芸術、文化、科学の中心であり続けたこと、そして短い間ですが、その職員として勤務していたことを今も誇りに感じています。

私が青少年センターで勤務したのは昭和最後の2年で、珍しいことに、教員採用試験を合格した結果、新採用として青少年センター科学部科学課に配置されました。当時は4月からは県立高校の教員になると思っていたので、正直いってショックでした。そんな中、青少年センターの先輩方が私たち着任者を大変温かく迎えてくださり、周囲には学校から転勤してきた先輩もいて、短い期間で仕事を楽しみながら覚えていきました。主な業務は、毎日のように大型バスに乗って「一日体験活動」に来る県内の中学生の実験指導でした。「一日体験活動」とは展示場・プラネタリウムの見学と科学・芸術分野の講座がセットになった校外学習活動のことで、私はその中でガラス細工や感光性樹脂を使ったスタンプづくり、望遠鏡づくりなどの物理分野の講座を担当しました。来所した中学生とは、わずか2時間の交流でしたが、学校の授業では味わえない感動を与えようと、前日は全力で準備し、おもてなしの精神で迎えていました。講座の半ばになると子どもたちからは先生と呼ばれるようになり、完成した作品はお土産として大事に持ち帰ってくれました。夕方には職員みんなでバスに乗った中学生を見送り、今度は自分が感動していることに気付かされました。土日交代で出勤し、小学生向け科学教室や電子顕微鏡講座、パソコン講座（当時はマイコンと呼んでいました）などを担当し、どれも人気メニューでやりがいのある講座でした。今振り返れば、どの仕事もやりがいがあり、しかも自分にとても合っていました。

こうした経験を経て、県立高校の教員になりましたが、青少年センターで経験した、子どもたちに感動させることの喜びや、全力で授業の準備をすることの大切さなど

は、今も変わらず大事にしている情熱の一部になっています。

これからも時代とともに、青少年センターの役割は大きく変化していくと思いますが、今後も、子どもたちの成長を支え、そして、それを支える大人を支援するセンターであり続けたいと思います。私も青少年センター職員のOBの一人として、これからも青少年に負けず、ともに成長し続けていきたいと思っています。

最後に、青少年センターを支えてくださった県民の皆様、職員の皆様に改めて感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。ありがとうございました。



展示場にあったフェアレディZのカットモデル

当時、最新の展示物で人気がありました。エンジンも真っ二つにカットされていました。

青少年センターから生まれた線香花火屋

関東学院大学非常勤講師
科学課元職員（1991～1994年） 横山 一郎

線香花火屋は、線香花火のもつ科学的魅力を伝える同好会で、青少年センター科学部科学課から生まれました。

私が勤務した平成のはじめの頃、センターの3階には3つの実験室と準備室があり、私は化学準備室にいました。「線香花火を作ろう」は、先行研究や伝統的製法をもとに、配合の工夫とこよりの技術を用いて私が考案しました。身近な線香花火が自作できること、火球の形成と火花の変化など、科学的な探究心をくすぐる教材でした。

60周年へのメッセージ

「線香花火を作ろう」は、センターの事業だけでなく、青少年のための科学の祭典全国大会を通して子どもたちに科学の楽しさを届けてきました。この大会には1994年から2008年まで出展しました。多くの子どもたちが詰め寄せるブースのスタッフ集団として線香花火屋ができたのです。科学課の同僚や後任の関孝和さんをはじめ、高杉強さん、玉村和彦さんや、小学生科学教室や科学相談の常連だった吉田誠さん、中学生科学教室で上手に線香花火を作った鵜飼恵美さん、そして、関さんの中学校の教え子の竹ヶ原優希さんが主力メンバーになりました。他にも多くの仲間が参加しています。このように、線香花火屋は、センター科学部科学課のOBと、センターへの来館を機に線香花火の魅力に取りつかれたメンバーを中心に、もう30年近く継続しています。吉田さんは小学生の時から社会人となった現在まで、ずっと線香花火屋を支えています。センターから生まれた線香花火屋は、科学好きを育て、科学好きを広めていると自負しています。

しかしその後、線香花火屋にも厳しい時代の流れが来ました。テロ対策の強化や未成年の事故防止などの観点からでしょうか、未成年が火薬を取り扱うことが危険とされ、科学イベント等で不特定多数の子どもたちに「線香花火を作ろう」が提供できなくなりました。

これを受けて、千葉県理科教師の弓北清孝さんは、先行研究をもとに非火薬線香花火の教材化を検討していました。それを知った関さんがさらに配合を工夫し、2013年、「火薬を使わない 新・線香花火をつくろう」を完成させました。火薬を使わないので、本来の線香花火よりも繊細な技術が必要になりますが、子どもたちに火球と火花の魅力を伝えることが再びできるようになりました。この方法で、弓北さんと一緒に青少年のための科学の祭典全国大会に復活しましたし、センターで行われる青少年のための科学の祭典神奈川大会にも復活出展しました。メンバー一同、「センターへの里帰り」のような気分ですね。

2022年、コロナ禍を越えて、センターで3年ぶりの神奈川大会が実施され、「新・線香花火を作ろう」が戻ってきました。職員だったメンバーは皆60歳を超え、小中学生の常連だったメンバーは40代となりました。今も子どもたちが自分で作った花火は、魅力がいっぱいです。これからも、線香花火屋は新メンバーを養成し、線香花

火の火球と火花の魅力や科学の楽しさを伝えていきます。

青少年センターの思い出

展示課元職員（2001～2004年） 笠間 友博

私は2001年に茅ヶ崎高校定時制から青少年センターに異動し、3年間勤務しました。展示課で科学作文コンクール、展示室、おもしろ実験を担当しました。この3年間は私にとって多様な経験ができた濃い時間でした。科学作文コンクールは人生初の「起案」体験でした。前任の山縣さんより、これを年間40ほど作成する事が仕事と言われ、当惑したことを覚えています。しかし、科学懇話会会員の民間事業者の重役の方々と接する事ができた事や、受賞者、応募された学校の先生との交流も貴重な体験でした。足柄台中学の先生の中で、今でも付き合いがある人がいます。

おもしろ実験は学校の演示実験とは異なるストーリーのある見せる実験で、同じ実験でも担当者の個性が出る点も面白く、他の人の実験もよく見ていました。青少年のための科学の祭典全国大会に、小林さん、黒柳さん、前任の益田さん等と出かけたのも貴重な体験でした。自分は地学の教員でしたので、地学系の実験もいくつか考えました。その中の水槽を使った火山噴火実験は、今でも時々行っています。

全体行事として印象深いのは、こどもの日イベント（青少年センター40周年記念事業2002年）です。何よりも舞台芸術の方々の大道具の工作技術の素晴らしさに感動しました。駐車場に大きなプールを作ってメダカやドジョウを放した「めだかの学校」は、ビニールシートをテープで貼り付けただけだったと思いますが、子ども達が走り回っても撤収時にほとんど水漏れが有りませんでした。当時の青少年センターはエネルギーにあふれていたと思います。

そのような事に刺激を受けて、自分の趣味の釣りを活かして行った行事が「つりぐで かがくあそび」でした。横浜をさぐうでは、設置するテントの固定を非常に気にされていましたが、広告チラシにも案内を掲載していただき、多くの子ども達に楽しんでもらった事を覚えています。



2003年11月1日（土）横浜そごう屋上で開催した
「つりぐで かがくあそび」

仕事は楽しく ～青少年センターとの関わりを振り返る～

神奈川県立鎌倉高等学校 副校長
科学情報課元職員（2007～2009年） 築瀬 公成

理科の教員を志す理由は人それぞれですが、高校生の頃天文同好会と生物部に入っていた私は、理科部や科学部の指導をしたいという思いが強く、最初に赴任した学校で着任早々新入生に呼びかけ理科部を立ち上げました。生徒を引率してセンターで開催された県高等学校文化連盟（高文連）の理科専門部の行事に参加をしたのが、たぶん最初の訪問だったと思います。入館者数をカウントするセンサーのある階段から入館し、4階の階段教室まで上っていったことを今でもよく覚えています。その後、専門部の役員となり毎年開催される理科部研究発表大会に関わることとなり、平成15年からは専門部の事務局長として、センターとの関係が深くなっていきました。

平成19年の年度末に校長室に呼ばれ「築瀬さん、科学情報課って何か今まで関わりあった？」と聞かれ、よく知っていますと答えると、なんと科学部への異動の打診でした。そして、4月1日（日曜日でした！）に紅葉坂を上がることに。それからの3年間は主に科学の祭典や青少年科学体験活動推進協議会事務局の担当として業務にあたりました。1年目の秋頃に部長から「ミニ科学の祭典を出前形式で県西や県北など横浜以外の場所でき

ないか」という提案がありました。科学部では移動科学教室という行事を各地で実施していましたが、受付直後に定員に達してしまう状況が続き、申し込みなしで気軽に（近場で）科学体験ができる環境を必要としていたのです。手始めに小田原市と連携し、市の主催する行事の一部屋をお借りする形で初めての「子どもサイエンスフェスティバル」を実施しました。翌年からは小田原、相模原、大和の各地で独立した行事としてサイエンスフェスティバルを主催し、多くの子どもたちに科学体験の機会を提供させていただくことができました。協議会事務局の業務を通じて多くの企業や科学館・博物館、大学等とのつながりができたことはその後の仕事にも大変役に立ったのではないかと思います。

3年間の勤務を終えるタイミングで高文連の事務局に勤務することとなりました。高文連には現在26の専門部があり、それまでは理科専門部だけの仕事だったのが、合唱や演劇、日本音楽、美術・工芸といった神奈川県の高校文化部の活動全般に関わるようになりました。今でも神奈川県高等学校総合文化祭の閉会式をセンターのホールで行っています。異動した初年度、「文化フェスタ」という新規事業を立ち上げることになり、共催を当時のS館長にお願いに伺い、翌年度末に無事第1回文化フェスタを開催できました。この時にイメージをしたのが子どもサイエンスフェスティバルで定着したブース形式のスタイルが基本で、科学部での経験を生かすことができたと思います。

科学部に着任した頃、隣の課の課長が常々「仕事は楽しく！」と仰っており、今でもその言葉を唱えながら毎日の業務にあたっています。最後になりましたが60周年誠におめでとうございます。

開館56年目に厚木へ科学部移転 ～ありがとう紅葉ヶ丘～

神奈川県立座間高等学校 校長
元科学部長（2017～2018年） 村上 聡

【科学部の誕生】 科学部は、昭和37（1962）年の青少年センター開館以来、神奈川県 of 青少年に対して、科学の面から健全な育成を支援し、将来の神奈川県の科学技術

60周年へのメッセージ

系人材として活躍してもらうことを目的として活動してきました。

その拠点としての青少年センターの施設は、青少年に科学の面白さを体験してもらい、興味関心を高めるために神奈川県が設置した建物でした。ホール（現在の紅葉坂ホール）は別施設として建設予定でしたが、予算の関係で青少年センターの中に吸収され、センターはホールを含む複合施設として建設されました。全国的にも珍しいプラネタリウム（日本に5台しかなかった）を備え、全国からの視察も絶えない最先端の施設でした。また、開館から12年間は県内全ての中学2年生を迎えて「1日青少年センター」というイベントが連日催され理科実験・工作や科学展示物での学習が行われたり、休日は家族で楽しんだりできる、県民にとって思い出のある場所でした。

【2度の転機】 しかし、平成17（2005）年の大規模改修工事によって、重量軽減対策のためにプラネタリウムと天体観測ドームが撤去され、さらに科学体験のできる展示コーナーも撤去され、科学部にとって事業を見直す大きな転機となりました。

そして、これに匹敵する2度目の転機が、平成30（2018）年の科学部そのものの移転です。開館56年目にして、紅葉ヶ丘から移転することになりました。

【移転先の決定】 総務局から移転候補先として県内各地の数カ所の建物が示されました。平成29（2017）年の10月から、科学部職員で候補先の視察に出かけましたが、交通の便が悪かったり、十分なスペースがなかったり、建物そのものが老朽化しており安全な講座の開催に不安だったり……。そして何より、紅葉ヶ丘の建物のように100名ほどの参加者が安全に星空を観測できる屋上確保できないという最大の難点があり、なかなか良い条件の移転先がありませんでした。

県民局（現在の福祉子どもみらい局）の主導により、①最先端科学が時代の要請なので科学部機能の充実・企業等との連携を推進すること、②県内各地へのアウトリーチを展開しやすくすること、の2点が科学部移転の最重要ミッションとなりました。そのための最適地として、「さがみロボット産業特区」でもある県央地域に注目し、小田急線の本厚木駅に近い民間ビル「プロミティあつぎ」が最後の候補地として示され、最終的にその2階フロアが移転先として決定しました（平成30年2月）。

【紅葉ヶ丘から厚木へ】 それからというもの、執務室や科学体験室などの間取りを考えたり、新たに購入する設備・備品類の選定をしたり、紅葉ヶ丘にある大量の荷物の梱包や引っ越しの計画を立てたりという作業を、本来の事業と同時並行で行う日々でした。さらに、移転の前年度まで年間215万円の予算で、約200の事業（1事業＝約1万円）を8人で展開してきましたが、科学部の機能強化のための移転ということで300万円の予算が追加され、新たに先端科学企業等体験会や先端科学企業等移動教室（合わせて20回分）を行うことになりました。懸案であった天文関係の講座は、移転後も紅葉ヶ丘の青少年センターの屋上で実施することになりました。そして、平成30年の10月に2日間かけて引っ越しをしました。

【新生科学部】 移転によって管理課をはじめとして他の3課と離れることになり、連携業務の効率が低下した面もあります。しかし、移転先の教育委員会・商工会議所・企業・大学との連携を深めたり、新規事業を立ち上げたりすることにより、青少年に科学を身近に感じてもらえるような講座や実験ショーを新たなアイデアも加え引き続き実施しました。厚木の地でも科学部の本来の目的である、青少年への科学体験活動の推進は変わりません。

現在、私は県立高校の校長を務めていますが、校内の行事や会合等で「空気砲」のパフォーマンスを披露するなど、科学部での経験が生きています。科学部の歴史の中の一職員として青少年の育成に関わったことを今でも光栄に思い感謝しております。



引っ越しのため荷物を積み込むトラック

薬品類も運搬するので前方に「危」「毒」の表示があります。（平成30年10月22～23日）

紅葉坂と本厚木と

厚木市子ども未来部青少年課
子ども科学館担当主幹 菅原 賢

駅を出ると、うなりをあげて走る車の列。おびえながら、とぼとぼ歩くガード下。小学校1年生にとっては、不安でいっぱいの小さな旅。あと少し。

坂道を登れば、すぐそこだ。青少年センターで過ごす一日は、少年時代の年に一度の楽しみだった。

プラネタリウムで、専門家の語る宇宙の話に聴き入り、展示室に並ぶ謎めいた装置に胸を躍らせ、売店で買った菓子パンを屋上でほおばりながら港を行きかう船を眺めた。将来プラネタリウムや科学館で働きたいと夢見るようになったのは、この頃からかもしれない。

十数年後、いくつかの偶然を経て開館直後の厚木市子ども科学館で働くことになる。当時の足立原厚木市長がかつて青少年センターの館長であったこと、先輩職員が、青少年センターの河原先生に投影の手ほどきを受け、プラネタリウム運営のスタートに漕ぎつけたと聴き、不思議な縁を感じたのを思い出す。

厚木に拠点を移された青少年センター科学部のみなさんと、連携を進めつつある現在。厚木市子ども科学館は(仮称)未来館として生まれ変わろうとしています。改めて青少年センターの歴史に学びつつ、笑顔であふれる施設を目指しています。

開館60周年誠におめでとうございます。そして、ありがとうございます。ますますのご発展を心からお祈り申し上げます。

「金星太陽面経過観測記念碑」について

川崎天文同好会 内野哲 小川 誠治

日本天文学会が2018年日本天文遺産の登録事業を始めたことから、日本天文学会会員の小川誠治と経緯に詳しい川崎天文同好会の内野哲が協力し、横浜の観測記念碑三か所を同時に登録申請したところ、日本天文学会は、2021年度日本天文遺産に、明治7(1874)年12月9日金星の太陽面経過観測地三か所(横浜、神戸、長崎)を認

定しました。

横浜には、メキシコからはフランシスコ・ディアス・コバルーピラス隊長と5名の観測隊員が観測を行いました。日本からは、海軍中尉吉田重親他5名が参加して、野毛山を第1観測地(現在個人宅、横浜市西区宮崎町)、山手本村(現在フェリス女学院高等学校内、横浜市中区山手町)に第2観測地を置いて観測に成功し、この二か所が日本天文遺産に認定されました。

神戸・長崎には碑があったのですが横浜には碑が無かったので、観測後100周年を迎える、昭和49(1974)年、横浜で天文学上重要な観測が行われたことを後世に伝えるため、神奈川県内のアマチュア天文愛好者が、同観測記念碑設立期成会を結成しました。同年、会の役員で川崎市立小学校の校長であった箕輪敏行氏が同校のPTA会長で神奈川県議の吉浜照治氏に事情を話したところ、同県議が県会に於いてこの観測の重要性を紹介し、台石の文化財としての保護を訴え、津田文吾県知事は直ちに実現を約し、大型記念碑設置等に大きな弾みとなりました。

その後、期成会が中心となり設置の推進を図り、神奈川県立青少年センター天文課長河原郁夫氏が積極的に県の関係各位にこの事業の意義を説明して下さる等のご支援により、同年神奈川県および横浜市の援助を得て、第1・2観測地には小型の碑を、また第1地点近には県立青少年センター館長の承認を得て敷地内に大型の碑を建立し、観測100周年の同年12月8日この大型碑の除幕式が行われ、当時のメキシコ大使が出席され、ご祝辞を頂きました。

1977年に期成会はこの記念碑の寄贈を県に申し入れ、長洲一二知事により受理され期成会は解散しました。大型の碑は同青少年センター改修後もセンター前の道路脇に保存されていて、第1観測地の台石は、敷地を所有されている方により大切に保存されています。第2観測地には、フェリス女学院高等学校のご厚意により、敷地内で道路から見える位置に説明板付で保存され、認定を記念し新たな指標も同女学院により設置の予定と伺っています。

難しい天文現象ですが、今後も神奈川県・横浜市の他、関係各位の深いご理解とご援助が末永く続き、この観測の事実と台石・碑を含めて、神奈川県的重要文化財に指定され永久に保存されることが望まれます。

60周年へのメッセージ

横浜の記念碑の特長は、資料の発掘から整理分析、行政との折衝、記念碑の建立などを、川崎天文同好会の箕輪敏行氏、森久保茂氏（医師）らの呼びかけで県下のアマチュアが行ったことです。

記念碑建設後の同会の懇親会で、親身にご協力頂いた当時の東京天文台の齋藤国治先生が、「本来は天文のプロがやらなければいけない仕事を、アマチュアの皆様にして頂き、心から感謝申し上げますが、同時にこの意義を理解できない学者もいて、プロとして恥ずかしい」旨の挨拶をされていらっしゃいました。箕輪氏たちが、「何をおっしゃいますか。我々はそんなちっぽけなことではしていませんよ。何万光年という大宇宙の大きな気持ちでやっていますから、気になさらないでください」と返事され、齋藤先生と笑ってお互いの功績をたたえる、微笑ましいシーンを覚えております。なお、齋藤教授は後に日本天文学会の会長となっております。

おことわり 金星が太陽の前面を通過する天文現象の表記については、日本天文遺産認定理由では、「金星太陽面通過」、観測記念碑設立期成会が設置した記念碑では、「金星太陽面経過」となっております。



青少年センター近くの紅葉坂に設置された大型記念碑

column

金星の太陽面経過

金星は地球よりも太陽に近い軌道を公転しています。このため、ごくまれに太陽表面を金星が通過する現象を観測できます。これを金星の太陽面経過と呼びます。

金星の太陽面経過が起こる年を調べてみると1769年、1874年、1882年、2004年、2012年、2117年です。その間隔は105.5年、8年、121.5年、8年、105.5年です。

なぜ、このような間隔で、太陽面経過を観測できるのでしょうか。

金星の軌道面は黄道面に対して3.4度傾いています。太陽面経過が起こるためには金星と地球の軌道面が交わるところで太陽—金星—地球が一直線に並び、「内合」が起こる必要があります。地球が金星の公転軌道面に位置するのは年2回(6月上旬と12月上旬)です。また、金星と

地球の内合は583.92日ごとに起こります。金星の太陽面経過を観測できる可能性のあるのは最短では、0.5年の整数倍と583.92日の倍数が一致する会合周期5回目の8年後となります。さらに、105.5年は会合周期66回分、121.5年は76回分です。このように、太陽面経過は、金星と地球の軌道面が変わるとことで、内合が起こる年にだけ、観測のチャンスがあります。

さて、地球と太陽の平均距離は「天文単位」という天文学において極めて重要な距離の尺度となります。

ところが今から150年前は、現在のように高度な天体観測機材はなく、地球と太陽の距離も正確には分かっていませんでした。そこで、金星の太陽面経過を地球上の異なる観測地から観測することにより、その視差を利用して地球と金星の距離、地球

と太陽までの距離を正確に決定しようと考えました。

そのチャンスは、1874年（明治7年）12月9日にやってきました。このときの金星の太陽面経過は日本で好条件に観測できることから、メキシコ、フランス、アメリカ等の観測隊が横浜、神戸、長崎にやってきて、観測を行いました。横浜ではメキシコ隊が野毛山と山手で観測しています。（現在も西区宮崎町の民家の庭に観測台の石が残っています。）そして、1974年、観測から100年を記念して青少年センターの敷地内に金星太陽面経過観測記念碑が立てられました。

青少年センター開館60周年に寄せて

公益社団法人 日本舞踊協会 神奈川県支部 支部長
泉 翔蓉

この度は開館60周年、誠におめでとうございます。

青少年センター青少年ホール（現・紅葉坂ホール）では日本舞踊協会神奈川県支部における定例舞踊公演「神奈川県名流邦舞祭」に共催くださり、例年開催させていただいております。

また、当支部の青少年育成プログラムである「青少年のための舞踊講座」の稽古実施会場として毎月ご協力をいただいております。

神奈川県下における地域への文化普及と振興を目指します当支部へのご理解とご協力に、この場をお借りして感謝を申し上げます。

昭和57年に支部創立20周年を記念し「神奈川風流」を始め、30周年記念「源氏物語」、40周年記念「むかしを今に」、50周年「夢草子」と回を重ねて作品を発表して参りましたが、横浜の地に市民に開かれた磐石としたホールがあつてのことと、その安心感を日頃より感じております。

日本舞踊に携わる我々としましては、芸術を開き、文化が根付くまでには安心できる場所と、継続したご理解が必要不可欠であると常日頃より感じております。

今後とも、神奈川県下における文化事業の発展と普及の拠点として、幾久しくご尽力頂きますようお願い申し上げます、お祝いの辞とさせていただきます。

マグカルから未来へ

神奈川県演劇連盟 顧問
井上 学

マグカルシアター（当初は平日1日だけ開催のマグカルフライデーもあった）が始まったのは2013年の春だから、もう10年近く前の話になる。委託を受けた制作補助的な立場で新しい事業に向き合うのは、それなりの苦勞

も多かったはずなのに、いま思い出されるのは充実した楽しい日々の記憶ばかりだ。

職員の方々が、新しい団体の登場するたびに公演を見て、終演後には事務室や演劇資料室に集い、「こんな風を感じた」「難しかった」「あのシーンがよかった」など、いつの間にか演劇フリークさながらに熱っぽく感想を語り合うようになったのも、懐かしく思い出される光景のひとつだ。

そんなマグカルの企画の中で特に印象に残っているのは、初年度「マグカルフライデー大会」の名目で実施した「大学演劇フェスティバル」である。

1980年代からのいわゆる「(第三次)小劇場ブーム」を知る者として、あの盛り上がりの発火点が主に東京の大学の演劇サークルにあったことを思うと、青少年センターをマグカルの趣旨である「若者の開放区」にするためには、なんとしても神奈川の大学演劇を巻き込むべきだと、いささか空回り気味の熱意をもって、あの企画を強く提案した記憶がある。それをセンター側も深く理解してくれたの実現だった。



大学演劇フェスティバル (2014.3)
きんきらきん企画 (横浜国立大学)

広報不足などもあって、フェスティバル自体が大きく成功したとは言えないけれど、その後、参加してくれた学生や後輩たちの多くが青少年センターに足を運んでくれるようになった。フェスティバルから波紋が広がるように、夢をもった若い演劇人たちがセンターに集まり、自分の居場所のひとつとして感じてくれているかのように感じた。

そうした若者の中から、マグカル・パフォーミングアー

60周年へのメッセージ

ツ・アカデミーや新国立劇場の演劇研修所を修了する者が出たり、彼らのひとりが企画した「ヨコハマ学生演劇フェス」が同じマグカルの一環として現在進行形で開催されていることを思うと、空回り気味の熱意から生まれた一度きりの大学演劇フェスティバルも、長い目で見ればかなり意義あるものになったのだと信じた。

僕がいうまでもなく、設立から60年以上、いつの時代も青少年センターは県内の青少年にとって、学校であり、遊び場であり、聖地だったと思う。そしてこれからもずっと、ただの劇場ではなく、ただの公共施設ではなく、自分たちのためのかけがえのない場であると感じられる青少年センターであってほしいと願う。

未来に続く里程標としての60周年、心からお祝い申し上げます。

祝：還暦 青少年センター

舞台芸術部企画課元職員
岡島 龍彦



センターの屋上で撮影した「リボンの騎士・鷺尾高校演劇部奮闘記」のチラシ用写真

1974年に入庁してから、4箇所目の所属として、青少年センターに配属されたのは、1985年で、もう37年も前の事。

記憶は、あまり定かではないが、当時のセンターは、子ども文化や科学など幅広い事業を持ち、舞台も小中高

の演劇・ダンス発表会や講習会、鑑賞事業は古典芸能（歌舞伎・能・狂言・文楽）から新劇・現代舞踊まで多彩に展開。そして何とも個性的な職員たちが揃い、県立施設の枠に収まりきれない唯一無二・梁山泊のような場所だった。

自分は、芸術劇場・子ども劇場の年間7-8本の公演を担当し、演目候補を探し企画した。

時代は、小劇場ブームで、当時の田村忠雄舞台芸術部長にチケットを貰い、横内謙介さんが主宰する善人会議（現：扉座）の「家庭の悲劇」公演を観たのが小劇場の初体験。満席の下北沢スズナリで、岡森諦さんや六角精児さん中原三千代さんたちの快演・怪演と、ギューギューの客席の熱気に圧倒され「こんな面白い世界があったのかあ!!!」とすっかり虜。その後は、週2-3回、都内のさまざまな劇場に通い詰めた。

そんな中から、新羅生門・ジプシー（善人会議）、青い実を食べた（劇団青い鳥）、野獣降臨（夢の遊眠社）、ISLAND（NOISE）、イーハトーブの劇列車（こまつ座）、第二章（加藤健一事務所）等々を、青少年センターの舞台上で上演し、客席（主に演劇部生徒）と舞台が鳴り止まぬ大きな拍手に包まれるカーテンコールに立ち会える喜びは貴重で忘れ難いものでした。

しかし、いざ振り返って見ると、この5年間の経験は、その後の様々な事柄につながった。

90年から全国都市緑化フェア事務局（都市公園課）に異動し、このイベントの構想委員を、NOISE主宰の「如月小春さん」に引き受けてもらったり、93年からのAIDS担当（保健予防課）では、啓発事業の一環として、HIV/AIDSに関わる人たちの思いを伝える朗読ワークショップや朗読劇場を、青い鳥演出家の「芹川藍さん」にお願いしたりした。

また2002年からの青少年課では、青少年センターのリニューアルや、不登校ひきこもり対応の拠点整備にも係り、定年前の最終所属となった文化課のアーツフェーション事業でも、扉座（主宰/横内謙介）に助けてもらい「ドリル魂（2009年）」「ドリル魂・横浜現場編（2010年）」を上演し、最後に約200名からのオーディションで46名を選抜し、役決めワークショップを含めて約3か月の稽古に立ち会い「リボンの騎士・鷺尾高校演劇部奮闘記（2011年2月26.27日）」を青少年センターで満席上演で

きたことは、感謝しかありません。

断片記憶しか書けませんでした。同様に青少年センターに、関わり、育てられた多くの人たちとともに、この60年を祝いたいと思います。

「祝!!還暦!! 青少年センター」

青少年センターでの演劇

劇作家、趣向主宰
オノマリコ

「青少年センター」という名前に引きつけられて、子どもが関連する作品をよく上演させてもらった。

子どもたちとの演劇に取り組むことは、わたしにとって、転機になった。2010年代中盤、わたしは演劇で何か賞を取って認められることや、集客を増やしていくことに疲れを感じていた。作品を発表するプレッシャーと、その作品を作るための資金準備、集客のために行わなければならない広報活動などで、とろとろと弱っていた。演劇公演は打ち上げ花火のようなものだ。俳優たちの稽古を含むたくさんの時間をかけて準備をして、本番は数日でパッと消えてしまう。準備をただけの手応えをどこかで期待していたのだろう。感想アンケートやSNSに載る感想を見ても砂を掴むように感じられた。名を知られた賞にノミネートされても、それを成果だと思えず、



新たなプレッシャーの種と、思っていた。自覚は少なかったが、うつ状態にあったのだろう。当時は夜なかなか眠れなかった。演劇公演することでの「手応え」というものをどこで

感じればいいのかわからなくなっていた。

その頃、中高生と行う演劇に出会った。学生と行なうものには、「学生の成長」が伴う。初めは「戯曲」という形式に戸惑って、たどたどしく本を読んでいた生徒が、一年たつとすらすらと本を読めるようになった。声の小さな一年生が、一年後に舞台上で大声を発するようになる。始めは言われたように動くのがやっとでも、そのうちに自分でアイデアを出して、行動できるようになる。みんなが安心して居つづける場ができたなら、そこで自分が寂しいこと、悲しさを抱えてきたことも話せるようになる。生徒たちの成長は、生徒たち自身の力によるものだ。でも、変化していく彼らを見ることは、わたしにとって「手応え」があった。そこにのめり込んで、3年間ほど、学生としか演劇を作らなかった。「演劇」が一種類のものではないと、彼らは教えてくれた。

大阪の高校生たちが、作品発表のために青少年センターに来て、外階段からランドマークタワーを眺めていた。「あべのハルカスみたいで落ち着く」と言いながら。全然似てないぞと思いつつ、これからの発表する作品が神奈川・東京の観客にどう受け取られるか、どきどきしていた。幸福な時間を、多くくれた場所である。感謝を伝えたい。

青少年センターとともに

神奈川県民俗芸能保存協会会長
垣澤 勉

青少年センター開館60周年誠におめでとうございます。

青少年センターの所在地は、かつて神奈川奉行所があったところといわれます。幕末から明治の激動の時代に神奈川の行政・司法を担った中心施設であり、新しい時代に向けた船出の地といえます。

さて、神奈川県民俗芸能保存協会は、昭和44年に創立されました。主催する「かながわ民俗芸能大会」は、昭和39年以来30回にわたり県下各地を会場に実施されましたが、平成5年の大和市での開催を最後に途絶えました。

そうした中であって協会創立30周年、40周年の節目の年には青少年センター共催、会場としてセンタースタッ

60周年へのメッセージ



2009 かながわ民俗芸能フェスティバル メイン大会
フィナーレ

フの皆様のご協力をいただき実施することができました。
特に平成21年の40周年大会は、本協会が初めて県行政の支援を離れ協会員、ボランティアスタッフによる手作りの開催であり、不安の中にも大きな成果を得ることができた、心に残る事業となりました。

これを機に協会員の団結や将来への一筋の光を確認することができ、その後毎年、協会主催の主要事業として定着しています。

青少年センターは、新生神奈川県民俗芸能保存協会の出発地といえます。

これからも県民の文化・芸術振興のための中心施設として、発展し続けてほしいと願っています。

記憶の内と外

神奈川県国際文化観光局舞台芸術担当部長 兼
神奈川県立青少年センター参事 楳屋 一之

1960年代後半から70年代初め、中学高校と横浜の学校に通っていて、学校行事として青少年センターを訪れる機会は一度ならずあったはずで、しかしその頃の記憶は全く無く、もっとも高校の後半期は学園紛争の只中でもあり、自らの意思で学校行事には参加しなかったとも考えられるが、今となっては確かなことは言えない。青少年センターとの関係は大学を出て、勤めながら演劇活動を続け、やがてその存在が世間にも多少認知され始めた



スタジオHIKARI

1980年代後半に始まる。

1983年に旗揚げした、如月小春率いるパフォーマンス集団“NOISE”の公演が、青少年センターの青少年芸術劇場のプログラムに採りあげられ、1986年3月『ISLAND, YOKOHAMA』、1990年8月『ESCAPE』、1991年8月『家、世の果ての……』と3回、主催公演として実施された。なかでも『ISLAND』は、舞台上に多数のイントレを組上げ、20人以上のパフォーマーと30数台のビデオ受像器やシンセサイザー等のためのアンプやスピーカーを配置するなど、通常の演劇公演と違って設営に手間が掛かる作品で、準備が深夜に及んだことが懐かしく想いだされる。青少年センター30周年誌に如月小春が寄稿しているが、1990年8月、1991年8月、1992年8月と実施した中学・高校のワークショップは、その後の如月小春とNOISEのワークショップ活動の助走の役割を果たすこととなり、様々な場面が今でも強く印象に残っている。青少年センターを含む紅葉ヶ丘の整備計画が検討されていたのも同じ頃だったと思う。

1996年か7年頃のこと。当時の副館長田村忠雄さんにお会いする機会があり、私自身が青少年センターの企画に関わる可能性に話が及んだことがあったが、それは実現することなく私は東京の公共劇場の運営に携わることになる。2017年の春、神奈川県から青少年センターの企画運営をやってみませんかといった依頼を受けた時、四半世紀を経てこの施設に関わることになるかもしれない状況に宿命的なものを感じざるを得なかった。2018年4月、青少年センターに配属される。この年度から舞台

芸術課はホール運営課と名を改め文化課の紅葉ヶ丘駐在事務所として事業を推し進めることになる。ワークショップや公演事業に新しい人材を起用する。多目的スペースをブラックボックス化し、スタジオHIKARIとしてオープンする。プログラムの再編成を検討し、県の文化芸術事業との連携を促す。長期化するコロナ禍に翻弄される日々。そして、2022年60周年を迎えたホールの天井が全面改修される。

この先、青少年センターはどうなっていくのか。人材育成を中核としたプログラムはこれまで以上に多様に展開できると確信している。10年先、30年先の青少年センターの未来に大いなる期待を抱いている。

神奈川県立青少年センター 60周年おめでとう！

紙芝居文化推進協議会会長 絵本・紙芝居作家
長野 ヒデ子

私達、紙芝居文化推進協議会主催の手づくり紙芝居コンクールは神奈川県立青少年センターに支えられて続けてまいりました。いつも感謝の思いでいっぱいです。

青少年センターがリニューアルされた2005年に、コンクールの会場として多目的プラザ（現在スタジオHIKARI）の使用を許され、うれしくてとびあがりました。その年のコンクール記念冊子の巻頭言で、私はこんな風に喜びの気持ちを書いていました。

column

プラネタリウム

昭和37年11月に青少年センターが開館した時に日本で5か所目のプラネタリウムもオープンしました。最初の機械は五藤光学製のM1型でした。当時東日本では渋谷の五島プラネタリウムしかなかったので、青少年センターのプラネタリウムは大人気となり、一般公開の入場券がなかなか手に入らない状態でした。

この機械は昭和47年12月まで約10年間に10,000回以上の投影をしました。最後の頃はスリッピングと呼ばれる部品を毎日磨いて手入れしなければならぬような状態でした。そこで新型のGM-15AT型に更新しました。この時も人気が高く入れ替えのための休館期間をとれなかったため、年末年始の休みを使って更新しました。

プラネタリウムの投影方法は説明やおしゃべりを予め録音（プロの声優に頼むこともある）し、機械の操作も自動制御で行う自動（オート）投影と、しゃべりも機械の操作もすべて生で行

う手動（マニュアル）投影がありますが、GM-15ATは日本で初の自動投影ができる機能を持っていました。しかし、昭和50年代に各地で新しいプラネタリウムが作られ始め、そのほとんどが自動投影になったので、当館では敢えて自動投影をやめ、観客の層に合わせてよりきめ細かな投影ができる手動投影をするを選びました。この機械は昭和57年9月にGX-AT型に更新するまで約10,000回投影しました。GX-ATは平成15年2月にプラネタリウムが閉館するまで約14,000回投影をしました。プラネタリウムを投影し

て一番困るのが恒星球と呼ばれる電球が途中で切れてしまうことです。それまで見えていた星空が一瞬に無くなってしまいます。その時は慌てずに「雲が出てきて星が見えなくなりました」など言ってごまかしましたが、冷や汗たらたらでした。本当はすぐ交換したいのですが、ドームを明るくしないと交換できませんので申し訳なく思いつつ投影を続けたものです。

昭和37年11月から平成15年2月まで投影回数34,643回、入場者総数2,885,580人、一般投影解説話題476本でした。



60周年へのメッセージ



第18回手づくり紙芝居コンクール（2017年）で実演する横浜市内の小学生。満場の観客の前で、クラス全員で作った紙芝居を元気に発表した

ぴかぴかの神奈川県立青少年センターで！

うれしいですね。こんなぴかぴかの会場で紙芝居コンクールが開かれるなんて感謝でいっぱいです。県が紙芝居のすばらしさに26年前、いち早く目をむけてくださったおかげで生まれたこの紙芝居コンクール。伝統があり名前も紙芝居文化推進協議会となって6回目。県が支えてくださり、素晴らしい財産を神奈川県は生んでくれました。こんな誇らしいことはありません。

コンクールで紙芝居の楽しさに目覚め、たくさんの〈紙芝居が大好きな紙芝居人〉が誕生してきました。日常生活や郷里の昔話を題材に作品を生み出している人。紙芝居を深く知りたいと思う人。演じる楽しさを知ってボランティアを続ける人。このようにさまざまな輝く人達が生まれてきたのも、このコンクールのおかげです。しかも子どもは紙芝居を創ることで心を育て、その作品を観る大人達の温かい眼差しのおかげで、さらに大きく育ちました。

これまでこの舞台上で発表した人は延べ500人以上、応募作品数は5千点近く、ジュニアの部で応募していた子ども達が今では大人になり、コンクールを手伝ってくれるようになりました！

舞台芸術の職員の方には時には厳しく叱られることもありましたが、長年にわたりたくさんのお話を親身に教えていただきました。今年度、第22回手づくり紙芝居コ

ンクールを開催できるのも、ひとえに青少年センターのおかげです。

子ども達と共に学び楽しめる紙芝居の文化を、お互い支え合い、これからもご指導くださいますようお願いいたします。

60周年おめでとうございます。

県立青少年センターと人形劇

かながわ人形劇ネットワーク「かもめの会」世話人
久保 牧子

県立青少年センター主催の「かながわ人形劇フェスティバル」は、1985年（昭和60年）より途切れることなく開催されてきました。（2021年はコロナ禍にて録画配信）当初は県内人形劇グループの交流を主として開催され、県内3か所にて開催されていました。（アマチュア人形劇グループは当時県内150団体余）また夏には高校生が上演参加するフェスティバルが開催されていました。県立青少年センターがリニューアルされた2005年からはスタジオHIKARIにて2月の2日間午前午後に分けて4公演行われています。上演には県内のアマチュア人形劇グループが参加し、ファミリーを中心とした多くの人々に人形劇の魅力を楽しんでもらっています。また、公演後には講評の先生方から感想アドバイスをいただき、意見交換して各グループがより良い上演に向け研鑽に励む機会となっています。

第1回目から第27回（2011年）まで講師をなさってい



た（故）須田輪太郎氏（元人形劇団ひとみ座代表）からは、温かくも手厳しい講評をいただき、奮起するきっかけとなったグループも多いのではと思います。須田先生が長く講師を続けていらっしやったのは、身近に接して観ることの多いアマチュアの人形劇を何とかより良いものにして、多くの人に「人形劇」を好きになってもらいたいというお気持ちだったのではと推察致します。

「青少年子どもフェスティバル」は、毎年1月最後の日曜に、青少年センター全館使って開催され、子どもに関わる県内の団体30余が参加するフェスティバルです。（2021年2022年はコロナ禍にて中止）県内のアマチュア人形劇の勉強会“かながわ人形劇ネットワーク「かもめの会」”は、2014年から人形劇人形のワークショップで参加させていただいています。毎年違った素材の人形劇人形キットを準備して訪れた方に作っていただいています。小さいお子さんから大人の方まで参加してもらい、出来上がった人形を簡単なミニ舞台上で動かして遊んでもらって人形劇に親しんでいただき、家に帰ってからも人形劇を楽しんでいただけたらいいなと思います。

“こどもと向かい合う表現活動”を行うグループの活動を支援して来ていただいた中で、人形劇に取り組んできていただいたことを感謝申し上げます。

高校演劇と青少年センター

神奈川県高等学校演劇連盟事務局
（前事務局長） 小杉 隆一

県立青少年センター開館60周年おめでとうございます。私ごとで恐縮ですが、物心ついた時には、青少年センターはアンドロイド女性の挨拶を受けて階段を上り、科学技術について体験的に楽しく学べる大好きな場所となっていました。また行きたいと母にせがんだ記憶があります。その場所を高校演劇の聖地として認識したのは、高校生になり、県大会に同級生が出場するので応援にきたときだと思います。

その後、縁あって神奈川県立高校の教員となり、演劇部顧問として高校演劇に関わるようになりました。ほどなく神奈川県全体に関わる講習会や観劇会、そして全国

大会へと続く神奈川県大会の場として、生徒たちを引率して紅葉坂を登る日々が始まり、さらに神奈川県高等学校演劇連盟の役員として、講習会の企画や県大会の運営に関らせていただくようになりました。その際いつも、青少年センターの舞台芸術の皆さまにご支援いただけてまいりました。

具体的な取組みとしては、生徒たちの基礎力を育成するための講習会、優良な芝居を観劇することから芝居作りを学ぶことのできる青少年観劇会、高校生たちの自由な表現活動を実現する県高校演劇発表会（県大会）などがありました。状況によって形を変えながらもその時々的高校演劇部員に必要なことに取り組んでいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。



2019年県高等学校演劇発表会 瀬谷西高校の上演

高校演劇の活動は必ずしもプロの養成を目的としているものではありませんが、高校演劇を契機として演劇の道を志し、活躍している方々がいらっしやいます。県立青少年センターから飛び立った演劇人もたくさんいらっしやいます。そのような方々が県立青少年センターで高校生を指導していただく場面も多くあります。この経験は高校生たちにとって未来への希望につながるとともに、観劇者を含めて表現活動の担い手であることへの気づきの一歩となります。

これからも県立青少年センターが高校演劇の聖地として、舞台表現活動の担い手となる、創造する人や運営する人、そして観劇する人を育成する場としてあり続けることを願いつつ、私たちも微力ながらできることを続けて参ります。今後ともよろしく願いいたします。

60周年へのメッセージ

青少年センターと共に歩んで

神奈川県高等学校体育連盟ダンス専門部副部長
佐藤 敬子

神奈川県立青少年センター開館60周年おめでとうございます。

平成26年より神奈川高等学校体育連盟ダンス専門部は青少年ダンス発表会と青少年ダンス講習会を共催しております。それ以前は女子体育連盟が共催、H3年度高体連ダンス専門部が設立され後援になり運営にあたってきました。



2017 県青少年ダンス発表会

青少年ダンス発表会の始まりは体育の授業の創作ダンス。学校代表の発表会だったと聞いております。運営の先生方の中にも当時中学生だった頃の写真が青少年センターの記録に残っているそうです。

この発表会は小・中・高・大学、ダンス部のOGと異年齢の生徒・学生等が参加しており、お互いに良い刺激の場となっております。出演者は生徒だけでなく先生方が一緒に参加できる場で私も2度ほど定時制の生徒と一緒に出演しました。他にも照明を当ててくれることが出演する側の喜びになっております。また、運営する先生方も高校時代にこの舞台に立った経験者が増えております。現在57回を迎え、令和4年度は青少年センターホール天井工事の為、KAAT神奈川芸術劇場で行うことがで

きました。なかなか立てる舞台ではないので、出演者はよい経験をさせていただきました。

一方、青少年ダンス講習会の初めのころは青少年センターが現代舞踊協会から講師を派遣していただきました。ファンクと呼ばれストリートダンスの走りが入ってきたあたりからダンス人口は増え始めダンス部が各学校に設立され始めました。ファンクが入ってきた頃は木島恭子先生がジャズの中にこの要素を入れてくださいました。新しい動きに驚いたのを覚えています。今では当たり前前のランニングマンやロジャー・ラビットができなくて生徒も四苦八苦していました。

また、ジャズ・モダンの有名な先生方に指導していただきました。山形弁で話すおちゃめな花輪洋治先生。踊るとダンディで歩くだけでも素敵でこのギャップに引き込まれていきました。圧倒的なバットマンの高さ、髪型もスタイルも統一されている金光郁子キャラバンの講師の先生の技術力に圧倒されました。モダンでは中村しんじ先生の舞台の中に生徒が出演するという粋な計らいがありました。講習会ではペットボトルを使ったダンス、キャラクターダンスとして終わらない歌やトレイントレインをコミカルに踊ったのを覚えています。私も今も踊れるかもしれません。この後にコンテンポラリーダンスの流れが生まれてきました。初めて体験したのは内田香さんだったと思います。動物のような動き、ベビーという動き、おしりで回転して立ち上がるなどのダンスを指導していただきました。男子生徒が喜んでついていったのを覚えています。

楯屋部長が就任してからは、講師の希望を聞いていただくことができ、コンテンポラリーだが、ストリートダンスの要素が入り生徒のニーズに合うものを選んでいただいております。表現することの楽しさを刺激していただいております。

青少年センターは自由なダンス表現の場を支援してくれる場所で、これからもダンサー育成、生徒の経験の幅を広げるため良い関係を築いていきたいと思っております。

県立青少年センターの皆様のみますますのご発展をお祈りいたします。

芸術との出会いの場

演出家・東京デスロック主宰
多田 淳之介

神奈川青少年センター開館60周年おめでとうございます。

私自身川崎市出身で、特に横浜は活動拠点の一つとしていくつものクリエーションや公演をさせていただいてきました。県出身者としてもアーティストとしても神奈川県内の文化施設がまた一つ歴史を繋いでいくことを嬉しく思います。

青少年センターさんとは2017年より県内で演劇の手法を使ったワークショップをやらせてもらってきましたが、小田原にある寄宿生活塾はじめ塾の子どもたちと私が主宰する東京デスロックとの作品作りができたことが印象深いです。



2020 寄宿生活塾はじめ塾×東京デスロック
『Anti Human Education II ~TEENS Edit.~』
公開ゲネプロにて

子どもたちが考える“大人たちに受けてほしい授業”というテーマでの授業型演劇公演でしたが、2020年はコロナ禍により公演自体は中止で関係者のみの公開ゲネプロまでしかできませんでしたが、翌2021年には感染症対策を講じながらの観客参加型の上演方法から子供達と一緒に考え実現できたことは、演劇の力、芸術の力、何より子どもたちの力を改めて感じられる経験でした。

子どもたちの力を生かそうと思ったら、子どもたちひ

とりひとりを信頼し、ひとりひとりの価値を分かち合い、正解も間違いもなく、競争も達成も評価もない「芸術」ほど向いているものはありません。子どもだけではなく、芸術を必要としている人や、その必要性に気づく機会すらなくただただ苦しんでいる人もまだまだ多くいます。そもそも芸術は人生の楽しみや辛さと寄り添うための人類の発明ですから、それが無ければ人生が退屈で辛くなるのも当たり前です。いつの間にか一部の愛好家のものと思われている芸術ですが、芸術との出会いの場というのは本当に大切で、できれば大人になる前に出会えるに越したことはありません。

これまで青少年センターが芸術との出会いの場として果たしてきた役割、功績はもちろん、開館60周年を迎えてなお古びるところか様々なトライを続けていく青少年センターの活動によって、今後も人と芸術の数々の出会いが生まれることを期待しています。

「会い」の丘

ダンサー・振付家・OrganWorks主宰
平原 慎太郎

「自分は何者なのか」

「自分には何ができるのだろうか」

この問いかけは10代の頃から心の中にあった。

更に時間は決しても戻らないことを知ると自分が生きることが今やっていることの繋がりだと知って恐ろしくもなったり、同時に好きなことをやっているが無性に自信が湧き出て活力に満ちたり。

自分に自信がある時とない時が毎日の朝と夜のように繰り返しやってきていた時期があった。

自分の10代を思い出す。

そして現在。今はダンサー、振付家として活動をしている。活動というのは生活の基盤をダンスにまつわることで成立させているということだ。この神奈川青少年センターという施設にもダンスを通じて関わりを持っている。

ダンスを作るという響きにピンと来ない方もいるだろうが実際にそういう職業があって、それに気がつき、な

60周年へのメッセージ



Photo by bozzo

んとか自分の能力を活用し、何より、活用させてもらいながら生活を営んでいる。ありがたいことだ。

さて、ここの施設に関わっているとき時折若い青年達とすれ違う。10代中くらいから後半だろうか。その時に頭をよぎるのは彼らにどういう風にダンスを見てもらったらいいだろうかということだったりする。きっとダンスと接したことがない方達も大勢いるだろう。まだまだ幼く、しかし故に繊細な心を持ち、自分を探す途中で、古さと新しさに敏感に反応する10代を見ていると、こちら自分自身のその時期を思い出し、その時期に自分が見たかったものを提示したくなる。

そして次の思考に移る。その時に「自分が見たかった景色はなんだろうか」と。そしてその問いかけは、40代の自分と、少し忘れかけていた10代の自分が出会うきっかけとなる。

そして作品を作るときはこんな作品を一、WS（ワークショップ）を行うとしたらこんな内容を一、と物思いに耽ることができるのだ。それは鏡のように、青少年センターへ訪れた10代、例えばダンス系の部活の生徒達もいるかも知れない、そうじゃない方もいるかも知れないが、彼らの見たい景色になりたくなる。それは結局自分が10代の頃に見たかった景色であって、そこには結局自分自身への問いかけが他人を通じて行われる。

冒頭の10代の頃の答えに「自分というものは他者の中にある」という一つの問いかけに達したのもそこかもしれない。

自分というものは自分一人の時には成立しない。周り

に何かあると知ってから自分に戻ってくる。

なので、青少年センターに関わる時はガンガン面白いコンテンツを作りたい。

10代の頃見たかった、全く知らない世界ではないが、むしろ知っている世界の延長線上にありながら、世界観が突破していて、技術が高く、それぞれの出演者がイキイキと荒く呼吸をし、時間が止まり、もしくはあっという間に過ぎ去るような。脳みそがぐわんと揺れるような体験のそれを。

学校や部活以外にも刺激的な世界があると感じた時に、きっとそれぞれの何ができるか、何がしたいかの問いかけが生まれるような気がしている。

僕にとっての青少年センターの魅力。それは自分自身と再会し、若いこれからの皆と出会える場所であることだ。

また知らない10代の方と自分の中の10代と会えるのを楽しみにして。

コンテンポラリーダンス講習会を巡って

舞踊家（ダンスカンパニーカレイドスコープ主宰）
二見 一幸

この度は、開館60周年おめでとうございます。

寄稿文の依頼を受け、思いは随分と昔の桜木町の町並みへと飛んでいきます。絵画の壁画トンネルを抜けて急な坂を登ると見えてくる青少年センターは、ダンス公演や大会などでも訪れることが多く、秋の空には赤く染まった紅葉の裏道を覗いてみたりしたものでした。

現代舞踊協会より大人数のワークショップを依頼された時のことは、今でも思い出深く懐かしい記憶です。神奈川県ダンス部に所属する中学、高校生約200人が集まり、コンテンポラリーダンスの講習会を行い、その成果を最後にステージ上で発表するという初めての経験でした。

ダンスカンパニーカレイドスコープを主宰し、毎年公演を行っていたので、その時に創作していた「TINGLE」（ティングル）と言う作品なら、きっと学生たちも楽しんで踊ってくれだろうと抜粋シーンを準備しました。踊っ



二見一幸作品「TINGLE」舞台写真 撮影：塚田洋一

てくれていたカンパニーダンサーにもお願いし、総出で指導にあたりました。

タイトルの「TINGLE」はワクワクするという意味が

あり、ダンスの根本的な要素が含まれており、学生達も馴染みやすいのではないかという考えからでした。中学生と高校生でダンスシーンを変化させ、繋ぎ合わせ、何とか作品が成立した時には、学生たちの持つ可能性の大きさに、感動したものでした。3グループが3回同じ内容の作品を踊りステージ上で発表され、自身も含め指導に当たったメンバーは身体がポロポロになる程の大変な労力ではありましたが、中高生が長時間の練習の疲れを見せることなく、笑顔でコンテンポラリーダンスに挑戦し、はち切れるようなエネルギーで踊っている姿を見て、疲れも吹っ飛ばす喜びに満ちた時間となりました。

発表後には、本来の作品の全編をカンパニーダンサーが踊りました。学生たちは、習った動きがこんなふうになるのだと喜んで見てくれたこと。一緒に挑んだ数日間の間に友情のようなものが生まれた気がします。

column

縄文土器に竪穴式住居～紅葉ヶ丘遺跡～

平成17年（2005年）、開館から40年以上が経過し、建物や設備の老朽化が進んだ青少年センターでは、耐震補強を含めた大規模な改修工事が行われました。

その工事に先立ち実施されたのが（財）かながわ考古学財団による約1か月半の発掘調査。

青少年センターがあった一帯は幕末から明治にかけて「神奈川奉行所」が設置されていたことはご存知の方も多いと思いますが、発掘調査では、この神奈川奉行所に関連すると思われる、幕末頃の陶磁器類や瓦などのほか、ヨーロッパ製の皿などがたくさん出土しました。

しかし、さらに注目されたのが、それよりずっと昔、なんと、縄文、弥生時代から古墳時代の遺跡や遺物！

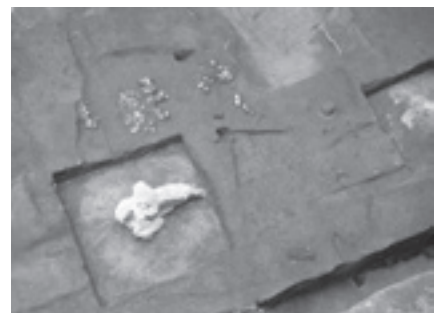
まず、この調査で最も多く出てきたのが縄文時代のもの。174㎡のそ

れほど広くない面積の調査場所から5,033点もの「石」のカケラ（石器）が出てきました。どうやら、この辺りは廃棄の場だったと考えられるそうです。また、いわゆる縄文土器や炉穴、土坑も見つかりました。

さらに、弥生時代の終わりから古墳時代の初頭の頃のものと思われる「竪穴住居址」が1軒発掘されたほか、

甕（かめ）が7点も出てきました。

みなとみらいの高層ビル群ももちろんなく、埋め立てられる前で海もずっと近くに見渡せたであろう、この丘の上で、幕末どころか縄文、弥生時代の人々が生き活きと暮らしを営んでいたかもしれないということに、ちょっとロマンを感じませんか？



「竪穴住居址出土遺物」「竪穴住居址」神奈川県教育委員会提供

60周年へのメッセージ

講習会から数年経ち、レッスンに訪れた生徒さんから「私、二見先生の作品を踊ったことがあります!」と、それが青少年センターでの、ワークショップだったことを知り感無量の思いに浸ることが幾度ありました。

講習会での思い出を胸に、再びダンスの扉を開こうとする思いに、これまでの努力が報われたような瞬間となり、自分の中では、青少年センターと言えば、こうした思い出が巡るのでした。全館の練習室を使用させて頂き、ホールまでの発表という贅沢な時間を頂き、大変お世話になり、ありがとうございました。

最後になりますが、新たな出会いと芸術を結ぶ青少年センターの益々のご盛会、ご発展を祈り、お祝いの言葉とさせていただきます。

中学校演劇、センターと共に

神奈川県中学校文化連盟演劇専門部参与
(前事務局長) 宮良 佳男

60周年おめでとうございます。神奈川県の中学校演劇の歴史はほぼ、センターと共にあります。年に1回開催されます県中学校演劇発表会や講習会は、今年度で60回と58回を数えます。まさにセンターと共に歩んできたと言っても過言ではありません。演劇発表会では、中学校の事情により、リハーサルはなく、技術打ち合わせのみで実施しております。これは他の大会では類を見ないことです。それが、スムーズに実施されているのは、舞台スタッフの方々の綿密な準備や打ち合わせでの聞き取り、それに職員の皆様の運営のご協力のおかげです。この場を借りてお礼申し上げます。

特にスタッフの方との中学生の打ち合わせにつきましましては、照明、音響、舞台装置など子ども達の様々な要望に対して、丁寧に接して頂き、無理難題な要望もプロとして何とかかなえてあげようとされる姿勢を感じ、子ども達も「プロフェッショナル」に遭遇する良い機会になっていることでしょう。

また、近年では関東演劇コンクール、県創作劇発表会も実施されるようになりました。関東演劇コンクールでは、青少年センターで実施されることが定着し、関東の



2015年(第53回)中学校演劇発表会より

子供たちにとっては、高校野球の甲子園ではありませんが「めざせ!青少年センター」を合い言葉に練習に励んでいるところです。

私ごとで恐縮ですが、私は中学生の時(50年ほど前ですが)、1日青少年センターという催しがあり、全学年(14クラス)が、バスに乗って、青少年センターを訪れ、主に理科の学習でゲルマニウムラジオを作ったり、科学の展示やプラネタリウムの見学をした記憶があります。中学生の私にとっては科学技術に触れる機会として鮮明に覚えています。(のちに理科教員になったのもなんらかの縁かもしれません。)1人の中学生としても貴重な体験でした。

時代に合わせて、青少年センターの施設も変化をしていますが、青少年にとっては大事な居場所です。今後も青少年の健全育成のため、青少年センターの果たす役割は大きいものがあります。更なるセンターの発展を期待します。

演劇資料室の現在、これから

演劇資料室ボランティア
山元 洋一

2005年神奈川県立青少年センター(以下「センター」という)はリニューアルオープンした。そこにはそれまでのセンターにはなかった「演劇資料室(以下「資料室」という)」が開設され、約8000冊に及ぶ戯曲書、演劇専

門図書を始め演劇雑誌、神奈川県内アマチュア劇団の上
演記録など、それまで横浜演劇研究所（以下「研究所」
という）が収集管理をしていた貴重な資料がセンターに
寄託され、多くの利用者が手に取って閲覧できることと
なった。全国に幾つかある演劇専門図書館でも珍しい開
架式の図書収納方式なので図書名を知らなくても目にふ
れることで閲覧することができた。

開館当初から資料室の運営は、神奈川県演劇連盟（以
下「県演連」という）と研究所に委託され、従事者はボ
ランティアの担うところであった。研究所の所員であっ
た荒井氏は開室当初から運営を担当し、貸出要領等の設
定にあたってはそれまでの研究所の要領が概ね引き継が
れた。但し図書の貸し出しは県の条例の規定もあり無料
貸出となった。

演劇資料室が開室すると、県内の演劇愛好家等からそ
れまで蒐集した演劇書籍などが寄贈され、日常作業の中
でそれらの資料を整理区分編纂することは容易ではなく、
未だ手つかずのものもある。

現在の運営状況は、依然としてボランティアの担い手
不足に苦しんでいる。

しかしコロナで抑えられてきた利用者も徐々に増加の
傾向を見せており資料室の役割は増してきている。

さらに研究所から引き続く2010年までの発行戯曲の「戯
曲目録」改訂版作製にも多くのボランティアがかかわり
内容の校正作業が続けられており、ここにもまた多大な
労力を要している。

センター創立から60年が経過し、新たな事業の展開が
期待されているが、最も身近な問題は「担い手の不足の
解消」である。演劇資料室の担い手のほとんどの者が70
代となっている中で、仕事のリタイア後の時間を資料室
に向けてくれている方々に感謝すると共に、新たなボラ
ンティア協力者の出現を待ち望んでいるのが現状である。

60周年に寄せて

劇作家・演出家 扉座主催
横内 謙介

神奈川県に黒岩知事が誕生し、文化芸術を街づくりの
中心にするマグカル運動が始まった時、推進のための意
見交換ミーティングをするマグカルテーブルの委員に、
神奈川所縁の演劇人として、ご指名を頂きました。

その会合のスタートで、委員や関係者一同、観光バス
に乗って県立の文化施設を見学するツアーが企画され、
その見学地のひとつに青少年センターが選ばれていまし
た。

当時、青少年センターは存亡の危機に瀕していました。
その数年前に私は3年続きで、宝くじ助成金のサポート
が付いた特別公演の企画を担当させて頂きました。その
頃、耳にしたのは、センターはいつ取り壊しになっても
不思議はないという悲しい予測ばかり。実際、当時セン
ターに付けられていた文化予算は極めて乏しくなってお
り、館長なども頻繁に入れ替わり、率直な感想として、
大きな公民館としか思えぬ有様でした。

しかし劇場はまだ十分に使えるものでした。特に、こ
の規模で回り舞台とセリを持ち、舞台袖も十分に深いこ
の小屋は、他の一流劇場と比しても使い勝手の良さは劣
るものではありません。もう45年前となる高校演劇時代
に、この小屋で初めて演劇というものに触れて、コンク



ールの県大会で人生初
の戯曲を上演させて
貰った私にとっては
劇場というものの、
いわば原風景がここ
にあります。だから
特別とは思わず過ご
して来たのですが、
プロとなり様々な劇
場を体験するにつけ
、半世紀前に舞台芸術
に特化して作り上げ
られたこの小屋の素

60周年へのメッセージ

晴らしさを改めて感じていました。

マグカル委員ツアーの目玉は、完成間近の芸術劇場でした。そしてこの新劇場が誕生すれば、いよいよセンターは役目を終えて、取り壊しになるだろうと誰もが噂していました。

一行がセンターに到着した時、私は少しでしゃばって、私を知る限りのセンターの由来、劇場機構の素晴らしさ、どれほどの名優、名ダンサー、パフォーマーたちがこの舞台上に立って人々を感動させてきたか、何よりも今尚ここは高校・中学演劇の聖地であり、毎年県大会が開催されて夏には本格的な講習会が開催されていることを皆さんにお話ししました。

それ以前に黒岩知事とは面識もなく、名だたる著名人メンバーにもほぼ知り合いはいなかったので、良く知らない芝居者が突然熱く語り出した状態で、皆さんさぞ驚かれたと思います。でも知事は私の言葉に耳を傾けて下さいました。知事はその時まで、センターのをご存じではありませんでした。その後、深く興味を持って下さって色々とお調べも頂いたと思います。

建築物としても一級品だと確認されて、歴史的建築家の当初のプランに戻そうと、建設後に勝手に植えられた樹木で隠されていたその姿が、もみじ坂から良く見えるように手直しされ、また劇場へのアプローチを心地よいものに改良するための工事も施して下さいました。

もちろん、それまで減らされる一方だった文化予算も新たに付け直して下さい、センター存続と復活の道を拓いて下さっています。

ただ私はこれは、演劇好きの知事と演劇の魂が宿ったセンターがたまたま出会えた幸運の賜物に過ぎないと思っています。やがていつかまた、この建造物が厄介なお荷物扱いをされる時が来ないかと危惧します。そうなった時に、いや、決してそうならぬように、ここに更なる文化芸術の宝を生み続けてセンターの値打ちを高めてゆくことが、我々、舞台人の重大な責務だと思います。

私と青少年センターの漫遊記

神奈川県演劇連盟 顧問
横田 和弘

私と青少年センターとの付き合いは長く、かつて青少年センター内にあった児童文化課との時代から。こども民俗芸能大会（レトロビート）の構成演出を手掛けたのが最初だったと思う。

実はこの大会、私の父弘行が受けていた仕事だったのだが、その年（1998年）急逝したため代打で繋いだのが最初だった。代打のつもりが結局2019年まで続くこととなった。

この大会は後継者問題に苦慮する神奈川県各地の芸能活動の中で活躍する子どもたちにスポットを当て、観客に観せるためだけでなく参加団体の将来を育てるといったことを目的とした大会でした。

県内各地を児童文化課の職員と共に取材を重ね出演団体を発掘した事が忘れられない。センターの技術スタッフを含め今でもお付き合いをしている人もいる。

取材先での多くの人達、団体との出会いも忘れられない。ある団体の親方が子どもたちを叱り続ける。曰く「今、わからなくてもいい。いつかあの親父が言っていたことはこれだったんだと気づく時がくる。将来のその日のために、嫌われたっていいから叱るんだ」の言葉。ある団体の老会長が、後を継いだ若きガキ大将を見て、「これで20年は安泰だ」と目を細めながら語ってくれた嬉しそうな顔。2004年に行

われた世界民俗芸能祭のフィナーレで日中韓の獅子舞の入り乱れたコラボレーションが行われた。その後日本代表の獅子舞の団体が、「日本の獅子舞は大きさを負けている。だから大きな獅子頭を作ってみる！」。後



日「作っただけで重すぎて本来の動きができないから止めた」と楽しそうに語ってくれた笑顔。挙げればキリがない。

旧青少年センター、旧ドームシアター、そしてリニューアルされた青少年センターと続いたこの事業は私にとっては、楽しくもあり、良い勉強をさせられた大切な経験となっている。

もう一つ大切なことを記しておかなければならない。私は18年間神奈川県演劇連盟の理事長を続けさせてもらった。その私と神奈川県演劇連盟を支えてくれたのが青少年センターと言っても過言ではない。

2005年、青少年センターリニューアルの時に開設していただいた演劇資料室はその後の演劇連盟の発展には欠くことのできない貴重な場となっている。

2006年の横浜世界演劇祭においては主会場となって、韓国の「超人」という劇団の仕込みが間に合わず日付が変わるまで、仕込み時間を延長してくれたセンターと職員の良い好意は忘れられない。

相鉄本多劇場（閉館）で行われていた「演劇博覧会」をセンターに移行出来た事、若き演劇人を育てるべく企画した「芝居塾」、合同公演、スタジオHIKARIの開設など挙げれば枚挙にいとまがない。多くはその時のセンター館長、文化課、その職員たちと立ち上げた企画でした。

青少年センターは神奈川演劇にとってなくてはならない聖地。いつまでもその神奈川の演劇の支柱であってくださることを期待しています。

60年のお祝いと、これからも続く繁栄を祈っております。

column

「紅葉坂ホール」と「スタジオ HIKARI」

閉館55周年を迎えた平成29年度に、記念事業の一つとして、これからも青少年の皆さんに一層親しまれる施設となるよう、「ホール」及び「多目的プラザ」の愛称を県民から広く募集し、施設を利用する青少年による投票を実施しました。

ホールは「紅葉坂ホール」が、また、多目的プラザは「HIKARI」が、それぞれ500を超える投票数の半分以上を獲得し、愛称として採用されました。

「紅葉坂ホール」を考案したのは、様々の年代の5名の方、「HIKARI」は演劇部に所属する中学生による作品です。

「紅葉坂ホール」を考案した理由

「『紅葉坂』は横浜の地名としてはかなりの知名度がある。」

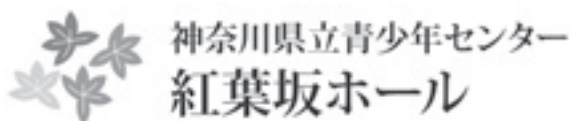
「『紅葉坂』という美しい地名を広めたい。」

「アイドルグループの〇〇坂のように、若さのイメージを感じさせる。」など

「HIKARI」を考案した理由

「この場所で行われている公演や、展示されている作品がキラキラと輝いている様子を『HIKARI』と表しました。」

また、シンボルのデザインは、青少年センターの4つの活動分野を歴史ある地名から4色の紅葉で象徴しています。それぞれの紅葉の葉は、若者達が躍動しながら、輪になって踊っている姿にも見えます。



60周年記念

P4「時代の記録」の開館及びP59のプラネタリウムの写真は神奈川県立公文書館所蔵

神奈川県立青少年センター60周年記念誌

The History of Kanagawa Prefectural Youth Center
1962-2022

発行・編集 神奈川県立青少年センター
〒220-0044 神奈川県横浜市西区紅葉ヶ丘9-1
印刷 株式会社TAKT-JAPAN

正解

廻り舞台



神奈川県立青少年センター